

ラトナラクシタのガナチャクラ儀軌和訳研究

静 春樹

はじめに

筆者はこれまで、西藏大蔵経に収められているガナチャクラ（以下、聚輪）儀軌のいくつかを和訳研究してきた。そして、聚輪儀礼がインド仏教がもった三つの乗の一つである金剛乗（真言乗・真言理趣）では、「行の体系」（戯論・無戯論・極無戯論）の内、戯論の行（*prapañcacyā*）に位置づけられて、金剛乗の根幹に関わる宗教実践となっていることを拙著『ガナチャクラの研究』で明らかにした。本稿が取り上げるラトナラクシタ（Ratnarakṣita）はヴィクラマシーラ（Vikramaśīla）大僧院の比丘で真言阿闍梨であった人物である。まさしく「金剛乗の比丘」である。こうした人物が著した聚輪儀軌を研究することは、インド仏教の幕が下りる時期に作成された聚輪儀軌の内に具現されている秘密真言（金剛乗）の精神性・実践規範を明らかにする上で極めて重要である。

本稿では、1) チベット人の手になる歴史書から最後期のインド仏教を担ったラトナラクシタを含む学匠・阿闍梨たちの活躍を見る。2) ラトナラクシタの著作および彼がチベット人訳経師たちと携わった翻訳作業を紹介する。3) 彼の主著 *Padminī*¹（以下、『有蓮華』）からラトナラクシタの思想性の一端を見る。4) *Padminī* 第八章より、聚輪儀軌次第の骨格と見なせる箇所を抄訳して出す。5) *Gaṇacakravidhicintāmaṇi*（以下、『聚輪儀軌如意宝珠』）の和訳を提出する。6) それについての簡単な考察を行う。最後にチベット語訳テキストを出す。

1 インド仏教終焉期とラトナラクシタの事績

ラトナラクシタの人物像・事績を記述する文献は少なく、生没年も知られていない。時代は下るが、ターラナータ（Tāranātha Kun dga' snying po 1575~1635）作『インド仏教史』「セーナ王朝の四王を始めとする時期の物語である第三十七章」には彼の人となりの簡潔な記述が出ている。本節では、先ず、インド仏教が終焉を迎える 13c 初頭の時代背景を押さえておくためにも、長文を承知でラトナラクシタに至るまでのヴィクラマシーラ大僧院を中心にして活躍した阿闍梨たちに関する記述を同章から引用する。

Lavasena の子は Kāśasena である。その子は Mañitasena である。その子は Rathīsenā たちである。それらの王たちがそれぞれ何年間統治したか明確なことはわからないが、どちらにしろ、彼ら四人〔の在位〕を合算しても八十年ほど以上には達しない。彼らの〔統治〕期間に、Subhākaragupta, Raviśrījñāna, Nayakapaśrī, Daśabalaśrī〔が出て〕、彼らの少し後には Dharmākaraśānti, Śrīvikyātadeva, Niṣkalaṅkadeva, Dharmākaraḡupta たちといったアバヤーカラ（Abhayākaraḡupta）に随順する多くの学匠と成就者²によって仏法が保持された。Rathīkasena 王〔在位の〕時に、カシミールの大パンディタであるシャーキャシュリーバドラ（Śākyaśrībhadrā 1127~1225, 1204 入蔵, 以下、シャーキャシュリー）とネパールの Buddhaśrī〔bhadrā〕と大阿闍梨ラトナラクシタと大学匠 Jñānākaraḡupta と大学匠 Buddhaśrīmitra と大学匠 Saṃghamañjāna と Raviśrībhadrā と Candrākaraḡupta たちといった持戒善知識・持金剛者・膨大な經典の大海の彼岸へ到った者が数多く現れたのであって、〔つまり〕二十四人の偉大な人士（mahānta）として知られるお方たちが出たのである。彼らの内で、大パンディタであるシャーキャシュリーの事績は広く知られた如くにその通りである。ネパールの Buddhaśrī もまたヴィクラマシーラ〔僧院〕で大衆部の長老を少しばかり為さった。後にネパール国へ帰って、秘密真言などを多く説かれた。行については意樂のままに為されたのである。大

阿闍梨ラトナラクシタは、波羅蜜乗と一般的な学問の知識ではシャーキャシュリーと同等であり、論理学ではシャーキャシュリーが善巧で、秘密真言（金剛乗）では、彼の方が善巧であると言われた。加持〔力〕と威神力も同等であると言われた〔そのような〕お方であって、具足戒を受けられたのは大衆部である。ヴィクラマシーラ〔僧院〕で真言阿闍梨を為さっておられた。チャクラサンヴァラ（Cakrasaṃvara）とカーラチャクラ（Kālacakra）とヤマーリ（Yamāri）を始めとする無数の守護尊のお顔を拝された。ある時、Potala でナーガと阿修羅たちによる観自在〔菩薩〕への供養の楽音から十六空の説法が生じたのもお聴きになった。灌頂の時にはいつも、智慧の存在を〔受者に〕降ろすことがお出来になった。バリ（*bali*）はダーキニーが実際に〔現れて〕納受した。酔象に向かって威嚇法（怖魔相）を為さったので〔象の〕体が硬直した。マガダ国が征服されるのも二年前に予言されて、意が堅固な弟子の多くがその時からカシミールやネパールへと赴いた。マガダ国の〔いよいよ〕滅亡の時に北方へ行かれた。Tirāhuti では、道に居た水牛が危害を加えようと現れた時に威嚇法を為されたので〔水牛は〕従順となった。〔水牛はラトナラクシタの〕御足を舌で舐めて、一由旬ばかり背に乗せて運ぶこととなった。ネパール国では、有情利益を拡大に為さり、チベットへも短期間巡錫して Saṃvarodaya〔tantra〕の註釈書をお作りになった。（中略）

〔こうした〕Sena〔王朝〕四王の〔統治〕期間に、外教徒の数はマガダ国でも次第に増大した。外道の宗義をもつ大食国（ペルシャ）人も多くやって来た。オーダントプリー（Odantapūrī）〔僧院〕とヴィクラマシーラ〔僧院〕で、王は要塞の形を少しばかり築いて数人の兵士に防衛させた。金剛座（Vajrāsana）では、瑜伽行者と大乘の徒で説法する者も居たが、大乘は根づかなかった。夏安居で一万人ほどの声聞 *sendhapa*（=*saindhava*）たちがそこで集会した。仏法の他の中心地の大部分が衰退していく一方で、ヴィクラマシーラとオーダントプリーの二つ〔の僧院〕では、アバヤーカラの当時と大衆の数は同程度であったと言われる。Rathika〔*sena*〕王の没後、Lavaṅsena という名の王が統治してからの数年は平和であった。そこへガンジス河とヤムナー河の間の Antarabhida 地域へ Candra と呼ばれる Turuṣka 王がやって来た。比丘のある者たちがこの王のために使者を務めたので〔悪〕因縁が生じて〔その結果〕この王と Bhaṃgala などの他の地方とその他の土地に居るたくさんの Turuṣka の藩王たちが同盟してマガダ全土を蹂躪し、オーダントプリー〔僧院〕の多くの出家者たちを殺戮した。〔彼らは〕これとヴィクラマシーラ〔僧院〕の二つとも破壊した。ついにオーダントプリー〔僧院〕の廢墟に大食国〔様式〕の要塞を築いた。パンディタのシャーキャシュリーは東方の Oḍiṃśā（オリッサ）地方にある Jagardala（Jagaddala）〔僧院〕へ行き、そこで三年間を過ごしてからチベットへ往かれた。偉大なラトナラクシタはネパールへ往かれた。偉大な学匠 Jñānākaraḡupta を始めとする数名の大パンディタは百人ほどの小パンディタと共にインドの南西へ往かれた。偉大な学匠 Buddhaśrīmitra と Daśabala の弟子 Vajraśrī は数多くの小パンディタと共に遙か南へ逃れた。学匠 Saṃghamaśrījñāna と Raviśrībhadra と Candrākaraḡupta を始めとする十六人ほどの偉大な人士たちは二百人ほどの小パンディタと共に遙か東の Pukhang, Mu-nyang, Kamboja などの諸々の地方へ往かれて、〔このようにして〕マガダ国で教法は滅亡した如くになった。この時期に成就者（*siddha*）や修法者（*sādhaka*）は数多く生存していたが、一般大衆である有情に相応するカルマ（*karma*）を転換する方便は〔彼らに〕生じなかったのである³。

ムスリム勢力の波状的なマガダ侵略という緊迫した状況とそれに続くインド仏教の事実上の滅亡が語られている。ムスリムによって大僧院が息の根を絶たれることは、ラトナラクシタの威神力に依らずともおそらくは予測されたことであろう。『インド仏教史』は、比丘たちの何らかの政治的関与がこのシナリオ実現の引き金となったと記している。名だ

たる金剛乗の学匠・阿闍梨たちが弟子たちを引き連れて各地へ逃れていく様は哀感を伴って我々の想像力を掻き立てる。インド仏教金剛乗は理念的にも、その現実的な存在形態にあっても、僧院を本拠とする比丘と在俗瑜伽行者の双極をもち、両者の緊張を孕んだ協業が続く限りにおいて存続するという社会的ダイナミズムをもっていた。外護者である東インドのパラ王朝が滅亡し、大僧院が破壊された結果、二つの極の一方である比丘たちが各地に逃亡してしまった場合、散在する在俗瑜伽行者だけで金剛乗を支えることは元より不可能であった。『インド仏教史』の記述もそうした理解を示唆している。しかし、「僧院の金剛乗」はインドの地で消滅したが、在俗瑜伽行者の道統は、チャルヤパダ (*caryāpada*, 行歌) を通して現代ベンガルに生きる放浪の音楽家にして修法者バウルたちの歌謡の中に辿ることができる⁴。

『インド仏教史』では、先ずシャーキャシュリーとの比較でラトナラクシタの偉大さが述べられる。しかし、ターラナータの短い記述は、彼の「加持力と威神力」の偉大さを示すのみで、「ヴィクラマシーラ僧院の真言阿闍梨(秘密真言のエキスパート)であったこと以上の具体的な事績は不明である。記述から推測すれば、Saṃvarodayatantra (以下、『サンヴァローダヤ』) の註釈書『有蓮華』は彼の短いチベット巡錫中に作られたことになる。ターラナータはラトナラクシタ入滅の地については何も語っていないが、前後の文脈から想像する限り、金剛乗の比丘たちの多くが移り住んだネパールの地で生涯を終えたと考えるのが自然であろう。マガダ国脱出後、ネパールを活動の舞台としていたラトナラクシタの足跡は、仏跡巡礼の途次にあった Chag 訳経師 Chos rje dpal (1197~1264) との交渉からその一端が明らかとなる。

〔Chag 訳経師は〕ネパールの Shing kun でラトナラクシタと出会った。師の下でカムの人 sTon grags を始めとする人たちが灌頂を要望する際に通訳を為さって、〔自身も〕サンヴァラの灌頂を受けられた⁵。

〔中山: 242fn3〕によれば、Chag 訳経師がインドへ行く途中にネパールでラトナラクシタに師事したのは彼が 31 歳の時の 1226 年である。この年はシャーキャシュリーが遷化した翌年に当たることから、中山照玲は、「当時既にかなり高齢であったと考えられるが、それでも尚ムスリムのネパール侵入の影響のためかその後にチベットに入国して活動しているので、シャーキャシュリー・バドゥラよりもかなり年少であったと考えられる」と続けている。このコメントは、先に引用した『インド仏教史』に出る阿闍梨たちの順番ともよく符合している。

もうひとつ、ラトナラクシタの名が出る『青冊史』の箇所を引用する。

Ko brag pa bSod nams rgyal mtshan の生国は Ging ri であり IDong 氏族に属している。(中略) 壬寅年 (1182) に誕生された。〔これは〕法主サキャパンディタ (Sa skya paṇḍita, 以下、サパン) と同じ誕生年である。(中略)

Se mig pa から優婆塞戒を受け、パンディタのシャーキャシュリーから Blo byong (浄覚) などを聴聞された。(中略)

大パンディタのラトナラクシタからサンヴァラの灌頂を聴聞された。それから、La phyi などに住された。法主 sKos を親教師、Phya ru 'dul 'dzin を軌範師、阿闍梨 Lo を戒師にお願いし、二十九歳で〔具足戒を受け〕一人前の比丘になられ、bSod nams rgyal mtshan の名を戴いた。(中略)

ネパールから Vibhūticandra を Ding ri に招請して師事し、Śabari dbang phyug から Vibhūticandra に伝授された六支瑜伽の教誡を聴聞した。パンディタも彼に法を訊ねた。

有情利益を不断に広大に為されて八十歳で辛酉年（1261）に示寂された⁶。

引用から、bSod nams rgyal mtshan がインド人パンディタと盛んに交流していることが分かる。この箇所でも、シャーキャシュリーの名が出ていることに留意したい⁷。[羽田野 1986a: 239~258] が論じるように、カシミールのパンディタ・シャーキャシュリーがチベット仏教に与えた影響は甚大なものがある。それもあつてか、巡錫中の出来事もよく記録されて残っている。それとは異なり、『インド仏教史』で、シャーキャシュリーと比肩されると語られているラトナラクシタのチベットでの事績は殆ど記録に残されていない⁸。

2 ラトナラクシタの著作と訳業

本項では、ラトナラクシタ自身の著作および彼が関わったインド撰述の典籍のチベット語翻訳作業を以下にリストアップする。彼が関与した諸文献のサンスクリット原典は一部を除きこれまで発見されていない。そこで筆者のこの作業は西藏大蔵経に準拠して行った。

1. ラトナラクシタの著作

śrī-Saṃvarodayamahātantrarājasya padminī-nāma-pañjikā⁹ (『有蓮華』)

skt. ed., 種村隆元「Padminī 第 21 章校訂テキスト並びに註」『密教学研究』41, 2009.

Toh 1420 (Wa) Ota. 2137 (vol.51)

A. Ratnarakṣita

Tr. Thams cad mkhyen pa'i dpal (Ota. Thams cad mkhyen pa'i dpal bzang po)

Re. Zhong blo brtan (Ota. Blo brtan)

Gaṇacakravādhicintāmaṇi-nāma (『聚輪儀軌如意宝珠』)

Toh 2494 (Zi) Ota 3320 (vol.70)

A. Ratnarakṣita

Tr. Ratnarakṣita, Zhang Grub pa dpal bzang po (Ota. Grub pa dpal bzang po)

2. ラトナラクシタが翻訳に関与した典籍

śrī-Dvibhūja-sahaja-śambhara-sādhana

Toh 1438 (Wa) Ota 2155 (vol.51)

A. rDo rje dril bu (Ota. rDo rje dril bu pa)

Tr. Ratnarakṣita, Chos rje dpal

śrī-Cakrasaṃvarābhisamaya

Toh 1498 (Zha) Ota. 2213 (vol.52)

A. Abhayākaraguptapāda

Tr. Ratnarakṣitapāda, Zhang grub pa (Ota. Grub pa dpal bzang po)

Svādhiṣṭhāna-kramopadeśa-nāma

Toh 1500 (Zha) Ota 2215 (vol.52)

A. Abhayākaragupta

Tr. Ratnarakṣita, Chos rje dpal

śrī-Vajravārāhī-pañjikālokaḥṛtyā-stotra-nāma

Toh 1574 (Ḥa) Ota 2282 (vol.52)

A. Koṅka byin (Ota. Koṅkanapāda)

Tr. Ratnarakṣita, Grub pa dpal bzang po

Gaṇacakravīdhi-nāma

Toh 2491 (Zi) Ota 3317 (vol.70)

A. Abhayākaragupta

Tr. śrī-Ratnarakṣita

Gaṇacakravīdhi-prakāśa-nāma

Toh 2495 (Zi) Ota 3321 (vol.70)

A. Herukavajra

Tr. Ratnarakṣita, Zhang Grub pa dpal bzang po (Ota. Grub pa dpal bzang po)

Vajrāvalī-nāma-maṇḍalopāyikā

skt. ed., Mori M.: *Vajrāvalī of Abhayākaragupta*, The Institute of Buddhist Studies, Tring, UK., 2011.

Toh 3140 (Phu) Ota 3961 (vol.80)

A. Abhayākaragupta

T. Abhayākaragupta, 'Khor lo grags

Re1. Shes rab dpal

Re2. Ratnarakṣita, Rāhulaśrībhadra, Chag Chos rje dpal

Re3. Blo brtan

Niṣpannayogāvalī-nāma

skt. ed., Buhemann and Tachikawa, *Niṣpannayogāvalī*, The Centre for East Asian Cultural Studies, Tokyo, 1991.

Toh 3141 (Phu) Ota 3962 (vol.80)

A. Abhayākaragupta

Tr. Abhayākaragupta, Thams cad mkhyen pa,

Re. Ratnarakṣita, Revendra, Chag lo Śākya'i dge slong (Ota. Ratnarakṣita, Revendra, dPal gyi mtha can)

Poṣadha-vidhi

Toh 3678 (Mu) Ota 4500 (vol.81)

A. Bhavabhadra (Ota. Bhavabhaṭṭa)

Tr. śrī-Ratnarakṣita, Zhang Grub pa (Ota. Grub pa dpal bzang po)

Cora-bandha

Toh 3690 (Mu) Ota 4513 (vol.81)

A. 欠

Tr. śrī-Ratnarakṣita, Zhang Grub pa (Ota. Ratnarakṣitapāda, Grub pa dpal bzang po)

Sastuti-sragdharā-sādhana

Toh 3692 (Mu) Ota 4515 (vol.81)

A. 欠

Tr. Ratnarakṣita, Zhang grub (Ota. Ratnarakṣitapāda, Grub pa dpal bzang po)

Cintāmaṇi-tārā-sādhana-nāma

- Ota 4505 (vol.81) (Toh 欠)
 A. Bhavabhaṭṭa (Bhavabhaṭṭa)
 Tr. Ratnarakṣita, Grub pa dpal bzang po

śrī-Vajravārāhī-prajñālokakṛtya-sādhana-nāma

- Ota. 4672 (vol.82) (Toh 欠)
 A. Kotamdadta (Kokdatta)
 Tr. Ratnarakṣita, Grub pa dpal bzang po

Upadeśa-mañjarī-nāma-sarvatantrotpannopapanna-sāmānya-bhāṣya

- Ota 5024 (vol.87) (Toh 欠)
 A. śrī-Abhayākaraḡuptapāda
 Tr. śrī-Ratnarakṣitapāda, Grub pa dpal bzang po

Maṅḡalaviniścaya-prakaraṇa-nāma

- Ota 5027 (vol.87) (Toh 欠)
 A. 欠
 Tr. śrī-Ratnarakṣitaguptapāda, Grub pa dpal bzang po

次に、以上の文献奥書に出るラトナラクシタの尊称をリストアップする。

- 「得成就者の大学匠 (tib. mkhas pa chen po)・比丘ラトナラクシタ」(Toh 1420)
 「インドの学匠・五明の大パండిタにして得成就者の尊者」(Toh 1438)
 「大パండిタ」(Toh 1498) (Toh 2491) (Toh 3678) (Toh 3690) (Toh 3692) (Ota 4505)
 (Ota 5024) (Ota 5027)
 「インドの学匠・吉祥なるサンヴァラ尊ご自身と区別無き大パండిタにして吉祥なる尊者」(Toh 1500)
 「パండిタ」(Toh 1574) (Toh 2494) (Toh 2495) (Toh 3140)
 「インドの大パండిタ・智者の大徳・最勝の得成就者・グル・大尊者」(Toh 3141)
 「東インドの大パండిタ」(Ota 4672)

また、[種村: 25] では、『有蓮華』の著者名として śrīmahāpaṇḡḡitabhikṣuśrīratnarakṣitapāda の語を回収することができる。

西藏大蔵経に出るラトナラクシタ自身の著作は、『有蓮華』¹⁰と本稿が取り上げる『聚輪儀軌如意宝珠』の二作のみであるが、チベット人訳経師と翻訳作業（再治も含む）に関与した典籍数の十五本は必ずしも少ないとは言えない。上記典籍を大まかに分類すると、タントラ註釈（1点）儀軌（5点）成就法（4点）現観（1点）讚（1点）要訣（2点）儀軌綱要書（3点）となる。ここから、「ヴィクラマシーラ〔僧院〕で真言阿闍梨を為さっておられた」ラトナラクシタに対するチベット人訳経師の期待がどの辺にあったかも明らかになる。また作者名が欠ける典籍が多い中で、Vajrāvalī と Niṣpannayogāvalī を含むアバヤーカラ（11c 後半~12c 前半）の作品六本は他を抜いている。その内には Gaṇacakravidhi (Toh 2491) も算えられるのであるが、この典籍が Padma 'byung gnas 作 Samayapañca (Toh 1224) の異訳であることは [静 2001: 1~26] が論証しているので、実質は五本となる。

チベット人訳経師の訳業については、先に挙げた Chag 訳経師の四本に対して Zhang 訳経師 Grub pa dpal bzang po の十一本はるかに多い。その内には聚輪儀軌として Herukavajra 作 Gaṇacakravidhi-prakāśa (Toh 2495)¹¹が含まれている。さらに、上記のアバヤーカラ作

とされる Gaṇacakraṅgīdhī は、訳者が「ラトナラクシタ御前」(ma hā paṅḍi ta śrī Ra tna rakṣi ta'i zhal snga nas so) と記されているのみでチベット人訳経師の名はない。この典籍の翻訳に Zhang 訳経師 Grub pa dpal bzang po が関わった可能性も十分に考えられる。この Zhang 訳経師の示現した威神力について『青冊史』は詳しい記述を残している。ここでは当儀軌との関連箇所のみを引用する。

〔Zhang 訳経師は〕大パンディタのシャーキャシュリーと dPyal 訳経師の下で具足戒を受け Grub pa dpal bzang po の名を授かった。大パンディタのお側で一年間住して法を聴聞した。(中略)

次に外国へ行ってネパールの Ye rang で大パンディタのラトナラクシタに師事して語学と論理学を学んだ。それぞれに註釈書がついたタントラを二百部以上、および八十四部もの完成された灌頂〔儀軌〕を得たと話しておられた。(中略)

丁酉年(1237)にヘールカの莊嚴国土へ赴かれた¹²。

シャーキャシュリーが具足戒を授けた弟子に dpal bzang po (skt. śrī-bhadra) の名を与えることは知られている¹³。記述から Zhang 訳経師はシャーキャシュリーのチベット巡錫の10年の間に受戒したことが分かる。このように、サバンと誕生年を同じくし、没年も近い Zhang 訳経師が受法・翻訳に熱心であったことが読み取れる。チベットの仏教後伝期には、情熱に燃えた数知れない若者がヒマラヤを越えて渡印したのであり、その地で命を落とした者も数多い。サバンの祖父でサキヤ派初祖サチェン・クンガニポ (Sa chen Kun dga' snying po 1092~1158) も長男クンガバル (Kun dga' 'bar) を留学の地インドで失っている¹⁴。無事に帰国し宗教家として名を挙げたドクミ訳経師 ('Brog-mi, 992~1074, 1072?)、マルパ智者 (Mar pa Chos kyi blo gros, 1012~1097)、ドルジェ・タク (rDo rje grags, 生没年不明, b.cir. 1016) といった人物が以後、己の身命を賭した投資の回収に励んだことも肯けるのである。彼らの活発な宗教活動が新たな社会関係のヒエラルキーを作り出し、チベット社会に大変動をもたらす。先駆けて渡印したチベット人訳経師たちは、権威の後ろ盾として、あるいは「新商品」の仕入れのために生涯に亘りインド人学匠・阿闍梨との繋がりを構築しその維持に励んだ。一方、Zhang 訳経師のような渡印しなかったチベット人宗教家たちは、ネパール・チベットへ巡錫して来たインド人に師事するのに務めたのである。サバンの根本グルであるタクパ・ゲンツェン (Grags pa rgyal mtshan 1147~1216, サキヤ寺座主 1172~1216) は、ムスリムの難を逃れて入蔵したインド人学匠たちを庇護したことで知られている。分厚い層のチベット人宗教家の活動が仏教後伝期の「チベット・ルネッサンス」となって結実したことは Ronald M. Davidson 著 “*Tibetan Renaissance: Tantric Buddhism in the Rebirth of Tibetan Culture*” が活写するところである。

3 金剛乗の比丘ラトナラクシタ

前節の文献に出る尊称から、『インド仏教史』の中で「真言阿闍梨」と出るラトナラクシタは、東インドを活動の舞台とした学匠・成就者・比丘であることが分かった。彼の名著『有蓮華』に目を通した限りでは、題名を出して引用された典籍とその回数は、『ヘーヴァジラ』(8)、『秘密集会』(3)、『金剛鬘』(1)、『金剛網』(1)、『ヴァジラダーカ』(2)、『吉祥ヘールカ現生』(1)、『アビダーナ・ウッタラ』(1)、『サンブタティラカ』(1)、『四天女所問』(1)、『金剛頂』(1)、『宝積経』(2)、『宝性論』(1) などである。引用された論師・阿闍梨は、サラハ (7)、アールヤデーヴァ (4)、インドラプーティ (2)、アールヤパーダ¹⁵ (2)、ジュニャーナパーダ (1)、ヴァジラパーニ (1)、ドーンビパ (1)、クリシュナパーダ (1)、ルイーパ (1)、タガパパーダ (Thagapapāda)¹⁶ (1) などである。秘密真言ではシャーキャシュリーを凌駕すると評価されるだけあって、ラトナラクシタが典拠を示さずに

出す文言を同定するのは困難を極める。それもあって、本稿で『有蓮華』を全体的に論じることが諦めざるを得ない。

ただ、金剛乗成立以降のインド仏教の僧伽にあって、「声聞乗の比丘」と並んで三学を異にする「金剛乗の比丘」が「党中党」を形成して共住していたその具体相を追求してきた¹⁷筆者は、この切り口からラトナラクシタの人物と思想を理解する一助として、『有蓮華』からいくつかの文言を以下に引用したい。

または、処と時の各別な決定も存在するのであって、まさしく、「世尊が劣った信解の者たちのために声聞乗を親しく説示されたのである。甚深を信解する者たちのためと離貪の心の者たちのために、波羅蜜理趣をよく明らかに為さってから、最勝に甚深なる法の器である者たちのために吉祥なる'Bras spungs の塔において、黒月の十五日に吉祥なる法界語自在曼荼羅を建立なさり、真言理趣の全ての論典を明らかに為されたのである」と説かれている¹⁸。

まさしくそのようにして、声聞乗を意趣する者たちがこの場（『サンヴァローダヤ』の説処）に住するのであって、〔それは〕離貪の心の故や劣慧の故である。それを説いて、「誰であれ禪定に住する比丘、論理を喜ぶ人、長老の立場に住する者には真実を説くべきではない」と言うならば、語るべきであって、この者たちは菩薩が化作した声聞〔の行儀をもつ者〕ではあるが、声聞そのものではないのである。それが説かれて、不共の秘密の瑜伽タントラでは、「阿難（Ānanda）は普賢〔菩薩〕である」云々などである。「そうであるならば、菩薩の輪〔に対する〕説示から理解するのであって、何のために各別に説くのか」と言うならば、真言理趣については、修法者（*sādhaka*）はまさしく比丘が最勝〔である〕と理解するためである。それも、「比丘を持金剛〔者〕となすべし。その者（持金剛者となった比丘）は粗暴〔なる者〕を威嚇すること〔に当たって〕の最勝〔であるが故に〕」と言われる¹⁹。ヴァジラパーニパーダ（*Vajrapānipāda* b.1017）も、「在家と沙弥の阿闍梨を見てから、阿闍梨は比丘が最勝〔である〕」と仰っておられる。声聞乗のみを信解する劣慧な者を見てから、〔その者たちを〕否定したとしても容赦されるという意味である²⁰。

〔この説処には〕聖観自在〔菩薩〕などのお方たちが居られるとしても、〔世尊が〕金剛手〔菩薩〕を照見なさるのは、その色身（仏身）と正法が守護できるが故と金剛乗を摂受するのに自在なるが故と難調な者を教化できるが故である²¹。

さらにまた、「愛すべき女尊の姿をして生まれた業印（*karmamudrā*）か、または智印（*jñānamudrā*）²²に抱擁され、自らの本尊瑜伽を具足することによって喩例から生じた楽自体が受用円満・結合・大楽・無自性・悲・相続不断・不壊と語られる」とは、七支（*saptāṅga*）²³を具えた観想を為しながら出世間者として〔仏を〕円満すべしとの要訣である²⁴。

「阿闍梨はまさに比丘でもあって」とは、まさに比丘を最勝の阿闍梨となすべしとの含意である。どうして阿闍梨がまさに比丘であるのかが説かれる。「ある者は」云々などというのであって、「秘密真言の理趣の次第によって道に住する者たちは、まさしく阿闍梨に相違ないのであり、甚深の法を信解しない人士を摂受するために比丘として住するのである」と説かれており、『金剛鬘〔タントラ〕』（*Vajramālātāntṛa*）の中で、「内では『秘密集会』を〔歎び〕、外では声聞の行を為す」と説かれており、同様に「秘密の禁戒に依止して無上位を成就する」と他でも〔説かれている〕。「ある者は徳」とは、神

通などの徳を具えているならば、比丘以外の者（沙弥・優婆塞）でも導師の阿闍梨となすべし〔ということ〕である²⁵。

真言理趣については、〔仏位を円満する〕道もまさしく観想を自性とするだけである。波羅蜜理趣については、住位（修道階梯）〔の向上〕を為すことを本質とする道を信受する者たちであっても観想を自性とするだけで一切がよく円満するのであり、戒などの外部のものに観待すべきではないからである²⁶。

五欲の享受も波羅蜜理趣に存在するのであって、「貪欲に依止しつつ〔善巧〕方便を知る者」云々などの言葉の故である。〔先述の〕「〔四種の人士（僧伽の四衆）たちは世間において〕儀軌の方法によっても〔成就しないのであり〕」〔の語〕は、そこ（『金剛頂タントラ』）では以下〔の如く〕に説かれていると理解すべきである。「迦葉よ、甘蔗畑や稲田や葡萄畑にとって糞便の堆積は不可欠である。まさにかくの如く、菩薩たちの煩惱は〔成就にとって〕不可欠となる」と『宝積経』で説かれているが故である。境は不浄ではないのであって、一切諸法が真如を自性とすることを證得するが故である²⁷。

「この稀有な教説は誰に対して」と言うならば、説かれる。劣った福德の者〔のため〕であって、劣った福德の有情たちであっても順次、教化に近づくであろうと密意するのである。あるいは、劣った福德の有情たちのために、真言乗は尊格の相だけによって自らを示すのであって、〔この者たちは〕尊格の相に依止してから、法身などを修習しつつそれに依止して、空性と悲が自性である般若と方便の双運を修習するということである。以下の真言理趣については、生起・究竟次第の本質である因と果を自性とする者が二つの道次第をよく説くのである。これもまた、「速やかに仏位が得られる」とは、精進を具えるならば、まさに今生において仏位が得られるからである²⁸。

「悲」とは、聚輪に対して金剛歌を唱うべしという意味である。誰によって息災などの羯磨（作業）が成就するののかと言うならば、説かれていて、「全ての相」云々などであって、最勝な全ての相を具えた清浄なる大楽が自性の方便および般若を自性にもつ〔者〕、サンヴァラとヴァジラヴァーラーヒーを観想する瑜伽者の意味である。「円満菩提」とは、聚輪などを為した福德を菩提心を自性とする真如として廻向すべしということである。「毎日」とは財があれば聚輪を毎日か毎月になすことであって、財がなくても毎年必ず行うのである²⁹。

「葦の髓から天井覗く」の譏りは免れないが、ラトナラクシタのこれらの言明から彼がもった思想性とエートスが明らかになる。論ずべきことは多いが、本稿では、「金剛乗の比丘」の微妙なしかし確固とした立ち位置に注目するに留めざるを得ない。『真実撰経』以来、金剛乗の阿闍梨たちは、真言理趣（金剛乗）の思想性は声聞乗のそれとは金輪際相容れないことを喧伝してきた。しかし、彼らは僧伽の実情も心得ていたのであり、「金剛乗の律典」において、「声聞〔乗の比丘〕とは七日間にわたり共住してはならない」とする一方で、「三乗を誹謗してはならない」とも定めている。ヴァジラパーニの *Laghutantraṭīkā*（以下、『チャクラサンヴァラ註釈』）は、僧伽の行事に際しての「金剛乗の比丘」以外のメンバーに対する実際的な配慮を述べ、具体的な対処法を定めている³⁰。

上記引用では、世尊の説法の場に住する大声聞たちも実は大乘菩薩の化作した姿であるとされる。真言理趣と共に大乘を構成するとされる波羅蜜理趣の經典も、金剛乗の自由な解釈に委ねられる位置に置かれる。言い換えれば、金剛乗あつての波羅蜜乗であり、後者の思想的自立性は奪われ、大乘という構成的枠組において「通大乘」に貶められているの

は明らかである。「声聞乗のみを信解する劣慧な者」は、部派仏教以来、全仏教史を通して存在したのであるが、それは別として、金剛乗隆盛の時代に、所謂「大乘」（波羅蜜乗）の信解者、つまり、ここで言う、性根として「離貪の心」をもつ者や、修道理念を「住位」階梯の向上に置く比丘たちが居たことは、上記ヴァジラパーニの著作からも知られるのである。しかし彼ら自身の積極的な発言は現行の西藏大蔵経には見当たらない。以上から、『有蓮華』に見られる意見はインド仏教が終焉を迎える時代の僧院（僧伽）の実情をかなりの程度で反映していると考えてもよいであろう。そして、上記の思想的立場を堅持するラトナラクシタは大衆部で出家した紛う方なき比丘であったことを再度確認しておきたい³¹。

4 『有蓮華』第八章より「聚輪所作」抄訳

チベット大蔵経中にラトナラクシタ本人の著作は、本稿が取り上げる『聚輪儀軌如意宝珠』と『有蓮華』の二本のみである。『サンヴァローダヤ』の難語釈である後者は、題名どおり、同タントラの逐語釈ではなく、ラトナラクシタが意趣釈できる余地をもった典籍である。聚輪儀軌を説く『サンヴァローダヤ』第八章「三昧耶と符牒の説示」の註釈についても、彼は聚輪儀軌の本体部分とも言える所作次第を要約している。それは、アバヤーカラが *Samputodbhavatantra*³²（以下、『サンプタ』）の註釈書 *Āmnāyamañjarī*³³ 中で、自らの簡潔な聚輪儀軌を纏めているのと同様である。筆者は *Āmnāyamañjarī* のチベット語訳に基づいて、アバヤーカラ自身の作であることが確実な「聚輪儀軌」を抽出した上でその和訳を提出し³⁴、その訳出のより高い精度は将来の *skt.* 写本の校訂出版に期した。本稿においても、ラトナラクシタの聚輪理解に資するために、『有蓮華』第八章中より所作次第の本体部分と考えられる二箇所を析出し以下に和訳する。

この章の撰義は以下であって、〔聚会処を〕厳重に秘匿して、三昧耶をもたずに入ってくる者を放逐する門衛を配置するのであり、極めて人けのない住居において座を準備してから、三昧耶の資具に三昧耶の丸薬で灑水して、阿闍梨を先にして曼荼羅の成員の全ての足を妙香水で洗ってから、灌頂を受けた年膺で着座する。闍伽などを献じてから、並べられた三昧耶の資具を阿闍梨が儀軌どおりに清浄と為して、花などの外供養を先に行う者は手供養の儀軌で満足させるべし。手にしっかり持った財物は尊格の口から出た最勝なる〔物の〕如くに観察して、羯磨金剛者 (*karmavajrin*) に飲食などのすべてに灑水させながら、阿闍梨は〔オーム、アーハ、フームの〕三文字を唱えるべきである。

次に、諸々の食物などで〔奉食とするために〕少しずつ取って大鉢に入れ、聚会の中央に置いて、〔阿闍梨はその〕天蓋と幢幡などで飾った大バリを最初に献じるべし。

次に、〔阿闍梨の所作が〕終わったところで、それに続いて羯磨金剛者が五甘露と五灯明からなる丸薬三粒が入ったそれぞれの器を右手で取り持ち、〔その上から覆った〕左手で三飛幡の印契を示して、「見られる法は清浄であるにもかかわらず、〔清浄ではないと思う分別を捨てよ。バラモンと犬とチャンダーラたちは俱に〔本性は〕同じとして食べよ〕というこの偈頌で阿闍梨を先にして全員にそれぞれ手渡しで献じるのである。受け取る者たちもまたその印契を指し示して、「善逝の法は無比であり、食欲と垢を断じている。所取と能取を遠離した真実に恭敬いたします」というこの偈頌で受け取るべきあって、食物以外のものなどもこのようにすべてについて為すべきである。そこで、「ピータ (*pīṭha*) とウパピータ (*upapīṭha*)」云々という二つの偈頌³⁵を誦誦して輪の導師の本尊輪を讃嘆すべきである。

その後で、施主が〔香〕曼荼羅を作成して、合掌して讃嘆し、頂礼を先に行ってから、

「お好きなように〔お楽しみ下さい〕」と語るべきである。
それに対して、「輪廻と〔涅槃は〕等同」云々などの偈頌³⁶で女尊（女性パートナー）を伴った輪の全員に施主のための〔吉祥の〕祈念を願うべし³⁷。

「残滓のバリを集めてから、生類と残滓を喰らう者たちに与える」³⁸というのは、忿怒と生類たちにバリを集めて〔施与するの〕である。以上のように説かれていて、聚会の導師を先頭にした全員が好きだけ五妙楽（*pañcakāmaguṇa*）を存分に享受する。それを飲んだ者たちが施主の善なる心を先に〔考えて〕、その善行を賞賛するのである³⁹。息災などの現前の願望については、〔修習の〕広観によって〔それらを〕円満具足した上で、広観した本尊の輪（三昧耶曼荼羅）を正しく（自身に）摂受してから、〔残滓のバリの施与を行うのであって、〕二手を上によく伸ばし、下方の二大指を正しく結んで二本の人差し指の先端を結び、残りの指は伸ばすというこの〔火炎の〕印契（*javālamudrā*）を口に向けて構えたところで、酒を口に満たし、三文字を先にした噴霧の字を唱えて残滓のバリを与えるべきである。
次に、施主が資具と蒟醬（*tāmbūla*）などをまた献じて、先に満足した者から頂礼して帰るべきであるというのである。〔以上が〕第八章の註釈である⁴⁰。

5 『ガナチャクラ儀軌如意宝珠』和訳

凡例

- ①チベット語訳テキストはデルゲ版本（台北版）を底本にして、北京版と校合した。
- ②テキストのローマナイズに当たり、引用を伴う典籍名はイタリックに、人名は最初の基字を大文字にした。
- ③翻訳上で補った語句は〔 〕で示し、訳語の理解を図るため（ ）内に説明の語句あるいは想定されるサンスクリットを入れた。
- ④全体の構成を知るための便宜的に作成した科文を最初に挙げた。

科文

0 敬礼文と総義の開示	249a1
1 聚輪の方規	249a5
1. 集会者の定義	249a5
(1) 総説	249a5
(2) 金剛阿闍梨の定義	249b1
(3) 三昧耶と律儀の同異	250a3
2. 時の定義	250a6
3. 場所の定義	250b1
(拒否すべき集会者の定義)	250b3
4. 儀軌	250b6
1) 前行	250b6
(1) 聚会処への入住	250b6
(2) 金剛阿闍梨の本尊瑜伽	251a1
(羯磨金剛者の定義)	251a6
(3) 資具の準備	251a7
2) 正行	251b1
(1) 曼荼羅成就と甘露奉献	251b1
(2) 性瑜伽	251b5

(3) 聚会の飲食	251b7
(4) 教誡	252a6
(5) 内護摩	252b1
(6) 歌舞供養	252b4
(7) 残滓のバリ施与	253a7
(瑜伽女の識別)	253b1
(聚会の区別)	253b7
3) 随行	254a4
2 奥書	254a6

0 敬礼文と総義の開示

インドの言葉で *Gaṇacakravādhicintāmaṇi* と名づけるもの。チベット語で「聚輪儀軌如意宝珠」と名づけるもの。聖ターラー（*Tārā*）〔女尊〕に頂礼し奉る。

最勝と共のすべての根基と道と成就の究竟に到るものをタントラの中で説かれている儀軌どおりに、それらをこの場で要約して語ろう。

三昧耶に違犯した罪を除滅しつつ諸々の障礙を克服して、願うところのすべての利益を成就し本尊も満足なさる。大印契悉地の速やかな授記を獲得するこの聚輪儀軌の以下の次第によって、願うところの果が与えられる。『サンプタ』の中で、「女尊よ、よく釈説するので聞きなさい。願うところの利益のすべてを成就させて、善行の聚会に敬礼する者は、食べることで成就する者である」⁴¹〔と説かれている〕如く、同様に、『金剛鬘』の中で、「次に別のことも釈説するので聞きなさい。この聚輪次第を供養〔儀軌〕どおりに行ずる者は誰でも自他の成就が近い者である」⁴²〔と説かれている〕。以下は客人と時と場所と資具と所作〔の五つ〕である。この最勝なる儀軌により、誰でも成就が現前する。

1 聚輪の方規

1. 集会者の定義（1）総説

そこで、聚輪の語〔義〕を目的に従って〔説くのであり、先ず〕客人の本質を釈説しよう。『具吉祥金剛鬘』の中で、「大瑜伽の三摩地と等同で一つにならしめてから、符牒と印契を組み合わせて知っている三昧耶をもつ者を入住させるのである」⁴³〔と説かれている〕。その内で、大勢が集う聚輪の本尊の〔供養〕次第自体は共の〔説示の〕時に説かれたものと同じである。殊勝〔な方規〕は以下によって知るべし。すべてにおいて三昧耶が同じ〔にして〕、一切の妄分別を普く断じ、グルを恭敬して三摩地に住し、布施を始めとする功德の莊嚴を飾る方便（男性瑜伽者）を、この場で聚輪に妨害者がなくなれば、正しく入住させるべし。そうでなければ罪過をもつことになる。方便と般若母は相互に魅了しあう〔愛〕技に善巧である。〔般若母の〕年齢が二十五歳を過ぎた者は全く遠ざけるべし。遍く般若母と方便は全員がペアであり、〔聚輪は〕一人だけの般若母で為すのではない⁴⁴。

（2）金剛阿闍梨の定義

この場で、第一の準備としてグルが弟子を摂受する。まさしく、『サンヴァローダヤ』の中で、「何であれ曼荼羅が善いものとなるには、阿闍梨を先に明示してから」⁴⁵〔と説かれており〕、阿闍梨が徳を堅持していなければ、世間に侮蔑されてしまう。阿闍梨が居なければ他の者でもグルの特相を具えた者を輪の自在者と為して、同じ恭敬の方規で為す。すなわち『金剛鬘』の中で、「息災を始めとする御事業とマントラと瑜伽の儀軌を知り、二十羯磨⁴⁶の区分〔を知ること〕が、まさしくグルの所作であると語ら

れる⁴⁷。布施と持戒と忍辱と精進と禪定の彼岸に到り、昼夜〔分かつた〕不斷に善行に励み、般若は鋭利で工芸に善巧であり、無二の徳によって養われる、この〔ような特相を具えた〕者が吉祥なるグルである。内では『秘密集會』など〔を歎び〕、外では声聞の行を具える殊勝なる要訣によって適切な明(vidyā)の行に弟子を撰受するのが教師たる存在である。同様に、曼荼羅〔儀軌〕などと經典と諸々の羯磨の集成と勝義の所作に通じ、三頭明などを自らが習熟して他の者に説く、〔それが〕瑜伽の次第〔に通曉した〕阿闍梨であって、〔大衆の〕心を魅了して撰集する阿闍梨である。十真実を十全に知って、曼荼羅を描く羯磨に善巧で、弟子を撰受でき、秘密灌頂の最後にまで到り、般若と悲を等同にもち、タントラの次第を結び合わせるのに善巧であり、甚深の行をよく具えているこのお方は金剛薩埵なる存在である⁴⁸〔と説かれている〕。まさしくヴァジラパーニが、『チャクラサンヴァラ註釈』の中で、「共の福德(布施などの五波羅蜜)の積聚は因であり、智慧〔波羅蜜の積聚〕は悉地を成就する方便である。」⁴⁹「優婆塞と優婆夷などは清浄なる阿闍梨に向かうべきである。この秘密真言乗の儀軌においては、阿闍梨は三種類であって、在家と沙弥と比丘であり、〔それぞれ〕下位・中位・最上である」⁵⁰〔と仰っている〕。施主は智慧が未熟であるが故に、一般的に棄てるべき〔駄目な〕阿闍梨は悲がなく怒る者、高慢で貪欲に関して堅固でない者、学処によって律せず貪欲が大きい者、自らを称赞する者〔であって、そうした者たち〕を〔聚輪の導師に〕してはいけない。特に在家の阿闍梨は婦人を伴った者、農夫、下僕、商人、愚者を獲得するために法を説く者〔たちである〕。これは聚會の阿闍梨ではない。この場では、持戒の徳を具え、瑜伽〔の修習〕と曼荼羅〔儀軌〕などに〔善巧で〕施主を承服させ供奉させることができる、この〔ような〕者こそが輪の自在者となる。この者を曼荼羅の指導者たちとしなければ施主の福德は損われる。

(3) 三昧耶と律儀の同異

この曼荼羅の輪において三昧耶と律儀が等しくなければ、輪の自在者は瑜伽者を集めてはいけない。他のタントラの学処〔を〕現證〔している者〕は別の住居で供養すべきである。真実は教証を具えているが故に、所作は意味を伴うのである。ある瑜伽者と瑜伽女で觀想の次第が異なっておれば、導師である瑜伽者の尊格を供養する。続いて、この次第で刹那に為す瑜伽によってその所化の尊格を供養するのであり、これこそが〔本尊瑜伽の〕正しい定義である。各別の諸々のタントラによって学んで解脱したと主張する場合には、符牒の次第が各別であり、相互の三昧耶の組み合わせが分からず、輪の儀軌は損なわれる。以上が客人の定義である。

2. 時の定義

次に、〔阿闍梨が〕本尊の我慢によって先に説かれた瑜伽〔を為したところで〕、〔施主は〕香曼荼羅〔作成〕を先にして、マントラによる供養を〔阿闍梨に〕懇願する。『瑜伽女の普行』などのチャクラサンヴァラ〔系〕タントラによれば、黒月と白月の十日にサンヴァラ尊をよく供養すべし。黒月の十四日と同様に八日に吉祥なるヘーヴァジラ尊を供養すべし。カーラチャクラ尊は〔三月と四月の〕十五日の二日に、グフヤサマージャ尊は毎月という如くである。〔白月の〕五日・八日・十日・十四日と同様に十五日であって、黒月でも五日あって、〔聚輪を転じるのに適した〕時は〔合計〕十日となる。以上が時についての殊勝〔な定義〕である。こ〔れら〕の日にいつも円満具足するか、あるいは欲するまま財力に応じて、可能なら毎日かすべての年、月に為すのである⁵¹。

3. 場所の定義

場所については、「人けのない処で秘密の輪をよく転じるべし」⁵²と『大印明点』の中で〔説かれている如く〕、一切の怖畏を離れた、人が近づかない心地よい村落か果樹園と森林と尸林と山中の洞窟で〔聚輪を転じるのである〕。最初に意を趣入して浄地すべし。曼荼羅に種々の花を撒くべし。『金剛鬘タントラ』の中で、「様々な花が撒かれた無量宮によって荘厳すべし」⁵³〔と説かれている〕。以上が場所の定義である。

（拒否すべき客人の定義）

「誰であれ三昧耶がなければ、息子など〔の身内〕であっても〔輪に〕入れてはいけない」と、まさしく『サンヴァローダヤ』の中で〔説かれており〕、「周到に準備された場所と座に入住させるのは、年長と若年の区別によって、その場に阿闍梨に続いて入住させるべし。器を具えずに大傲慢で、グルの過失を探し、タントラを誹り、以前の灌頂によっても異熟せず、自分の息子と妻と、男女の下僕をも伴った者が悉地を願うのであるから、修行者はこれらの輩を三昧耶に入れてはいけない。まさしくこれらの輩を〔輪に〕入れるならば、それは馬鹿げたものとなり、成就是遠のいてしまう。三昧耶が破摧されて苦の継続が身・語・意によって同様に蒙ることになる。住位から離れて円満具足が損なわれ、様々な苦を蒙ることになる」⁵⁴。修法者にとって同様に供養の対象と到達すべき瑜伽の成就が損なわれる。三昧耶のない輪を決して転じてはいけない。

1) 前行

(1) 聚会処への入住

〔定義に適った招請の〕対象となる〔金剛の〕兄弟姉妹は、理趣に適った場所に〔集うべく〕通知された瑜伽者〔であり、その者たち〕を阿闍梨の後から入住させるべきである。〔会処の〕外で瑜伽者を沐浴させてから、諸門を守護する阿闍梨に対して、次の偈頌〔の誦誦〕で入れるべきである。「青黒い忿怒〔尊の姿をしたお方〕よ。美しい汝は三昧耶に喜悦なさる。摩尼宝珠で荘厳した杖を手にお持ちのお方よ。私を輪廻から救うために瑜伽〔女〕の集会の中央へ、賢門を開いてから、勇者が許可して入れて下さい」。内では座に年膺の順で〔着座〕すべし。〔以上が〕曼荼羅の輪〔に着座〕の順番、または列〔に着座〕の順番である。

(2) 金剛阿闍梨の本尊瑜伽

次に、施主は〔金剛〕阿闍梨を須弥山上で刹那に、存在する〔法界〕宮殿の中央に〔坐す〕本尊の姿として見る。〔阿闍梨は〕三昧耶薩埵を自性〔とした存在〕に智薩埵を遍入させ、闍伽水 (*argha*) と漱口水 (*ācamana*) と灑淨水 (*prokṣaṇa*) を先にして、華鬘と焼香など共の供物 (外供物) を献じる。施主は讃嘆を為すべし。「吉祥なる金剛ダーカはダーキニーによって転じられる。五智と三身〔を具えた〕、衆生の帰依処〔であるお方〕に頂礼し讃嘆し奉る。一切の分別の束縛を切断しながら、世間の所作によく住するあらん限りの金剛ダーキニーたちに帰命し奉る。有と無の分別から解き放たれて、輪廻と出離の相が無二である無比の楽で満たされている輪の勇者などを讃嘆し奉る」。以上〔の偈頌〕で五体投地して頂礼すべし。阿闍梨はタントラの区別により、その場で三摩地の次第で自らの本尊の姿となって、いずれかの本尊の究竟次第を修習すべし。施主の守護尊が〔阿闍梨のそれと〕別であれば、〔阿闍梨は〕先に自らの守護尊を〔修習し〕、続いてまさしく刹那に施主が願う尊格の瑜伽を修習すべし。

（羯磨金剛者の定義）

タントラの中で説かれている特相を具えた羯磨金剛者の所作は、まさしく、『サンヴァ

ローダヤ」の中で、「清浄にして寂靜で智慧を具えた者で、癡と慳貪を捨て去り、一切に随順して見る〔瑜伽者を〕羯磨金剛者としてその場で識別する」⁵⁵〔と説かれている〕のである。同様に、『金剛鬘』の中で、「汝は生来の金剛心〔を具える〕無比なる羯磨金剛者そのもの」⁵⁶〔と説かれている〕。

(3) 資具の準備

次に、「様々な饗宴〔の飲食〕と肉と酒を等しく用意する。夢中にさせる楽を具えた資具、吉祥なる金剛薩埵が飲むマンゴー、パンの木の実、葡萄⁵⁷、ココナツの実などの様々な種類の果実を聚会の曼荼羅の中央に献じる」⁵⁸と『サンブタタントラ』の中で説かれている。

2) 正行

(1) 曼荼羅成就と甘露奉献

聖者ヴァジラパーニが仰っている〔如く〕、適切な聚会の瑜伽を為して、甘露の丸薬の〔入った〕水で洗浄して、始めにバリを与えるべし⁵⁹。『大印明点』の中で、「最初の大バリは、様々な品の飲食を具えたものである」⁶⁰〔と説かれている〕。最初と中間と最後で本尊瑜伽によるバリ奉献の所作は、前〔の地面〕に薫香などを塗り、薫香の滴で曼荼羅に自身の本尊の輪を儀軌どおりに生起させた上で供養する。三昧耶薩埵に虚空から智薩埵を鈎召すべし。その十幅に十忿怒尊を、守護輪の軸心に修法者の本尊自身を、守護輪の外に眷属を伴った護方神と土地守護神と尸林などを適切な現観のマントラによって〔安立すべし〕。刹那に自身の本尊を曼荼羅輪の影像として見て、明妃を伴ったお方として観想し、三昧耶〔曼荼羅〕に安立せしめる。適切な儀軌など〔について〕はバリを甘露として加持して、それぞれの〔尊格の〕マントラで献じるべし。特別なそれぞれの現観〔について〕は繁多を恐れて記述せず、周知のこと〔のみ〕を少しばかり書いた。

(2) 性瑜伽

次に、左手の無名指と拇指の二つを結んで、般若母の体液（śukra）を加持する。その前〔の地面〕に法源を描け。〔そこに〕般若母と方便の体液（愛液と精液）を撒く。本尊の曼荼羅を影像の如くに明澄に見るべし。守護され加持された住位で三摩地を為して心相續を断ってはならない。

(3) 聚会の飲食

次に、羯磨金剛者が阿闍梨に器を二つ献じるべし。他の者たちにはそれぞれ一つずつである。供物の品はグルに対しては二倍となるのである。そこで他の者たちは等同だと知る。誰かが〔未だ飲食に〕満足していないとしても、自ら取ってはいけないのであり、羯磨金剛者から受け取るならば、墮罪とはならないのである。何であれ手から〔地面に〕落ちた諸々の物は別のもので覆うべし。差し出す者はあまり満杯ではなく、受け取る者はあまり空ではなく、相互に〔摂受して〕一人に対して一人ではない。「欲しい」と言葉に出してはいけない。差し出す者は蓮華回転の印契で、左から上に〔両手を〕動かすべし。受け取る者も同様である。頂礼してから献じられるのであり、差し出す者も同様と知るべし。右膝を地面につけて、始めに方便と般若に向かい、「見よ、麗しい正法を。これに対して疑念を為すことはよくない。婆羅門も犬もチャンダーラも本性は同一と見て遊戯すべし」⁶¹。この偈頌で〔器を〕与えるべし。また受け取る者は、「善逝の法に比肩するものはなく、貪欲などの垢を遠離し所執と能執を離れた真如に帰依し奉る」。以上の偈頌で〔器を〕受け取るべきである。グルのお恵みが授けら

れたとしても、器を地面に置いてはいけない。許可が得られて〔から〕置くべきである。それ以外の場合には罰せられる。阿闍梨の許可が与えられないのに瑜伽者は飲食以外に他のことを為してはいけない。阿闍梨は最初に自身の印契女を供養した上で、それから遊戯すべし。飲物は愉快になる程度〔で〕、それより多くも少なくもない。樂を生起させるために飲むのであって、酔うためではないのである。

（4）教誡

瑜伽〔者〕の本尊の我慢と諸々の時とあらゆる場所での所作自体は、『金剛鬘タントラ』の中で、「聚輪に集うならば、〔無駄な〕お喋り⁶²など〔をしてはいけないのであり〕、同様に、〔心の〕散逸を断ずべし。唾液を吐くことなどと悪罵⁶³と冗談と手足を伸ばすことはいけない。何度も起立や着座したり、首を回すことなどは常に避けるべし」⁶⁴〔と説かれている〕。何であれ目的の相違に従って符牒と印契で伝達すべし。集会者の曼荼羅輪〔輪〕の自在者が許可を与えていないのに、他で歌唱と舞踏や樂器の演奏など〔をしてはいけない〕。甚深の言葉などを請問してはいけない。許可が得られてからは好きなようにしてよい。どんな飲食もすべて甘露と混ぜ合わせた上で〔集会者が享受する〕。

（5）内護摩

次に、自身の臍には、いずれかの目的の相違に従って尊格の輪が住すると思念すべし。自身の左右の手は、まさしく〔護摩の〕大勺と小勺が本来の姿〔であると思念する〕。臍の尊格に供養する方法は資具の品々で供養すべし。同様に色〔*rūpa*〕などの境〔*viṣaya*〕と眼〔*caḥsus*〕などの根〔*indriya*〕がまさしく適切な尊格の姿として清浄なる一味〔*ekarasa*〕で相互に〔観待していると〕知ることによって〔享受するの〕である。すなわち、『金剛鬘』の中で、「臍の蓮華の中央に勇者である自在者を憶念する。誰であれ、〔男性勇者〕一人に対して〔女性勇者〕一人が相互に〔観待して〕清浄であることを知らなければ、その者に輪の果はなく、一切成就の果が損なわれる。どこでもこの次第によって内外の〔存在の〕一切の自性が一味であるとして行を為すが故に、その者はまさに成就するのであり、正しい聚輪の果を生起させる」⁶⁵〔と説かれている〕。

（6）歌舞供養

酒が樂を生じさせたとき、歌唱と舞踏がしたければ、許可が得られてから金剛の歌唱と舞踏を瑜伽者は為すべし。すなわち、『二儀軌の王』（ヘーヴァジラタントラ）の中で、歌唱は清浄なるマントラとしてあり、舞踏はまさしく律儀を為すこと〔である〕。その故に、歌唱と舞踏を瑜伽者は続けて為すべし。〔手は〕歓喜の金剛縛によって、足は独鈷金剛杵〔で立つ〕。瑜伽の等至によって樂を生じるが故に、まさしくその舞踏が解脱の因であると語るべきである⁶⁶。〔これが〕タントラの中で説かれている次第であって、他所で授けられたものではないのである。『金剛鬘』の中でも、「歓喜を生じてから、〔阿闍梨の〕許可によって歌唱と舞踏を為す者は誰もが金剛縛など〔を為す〕。同様に、尊格〔たち〕も歓喜なさる」〔と説かれている〕⁶⁷。〔ヘーヴァジラ〕タントラの中で説かれた金剛歌〈*kollaire tthiā bolā mummuṇire kakkolā / ghaṇe kṛpīṭa ho vājīai / kuruṇe kīai ṇa rolā / taḥim bala khājīai / gāḍhem maaṇā pijīai / hale kvaye kāliṇjara paṇīai / duṇḍura vājīai / causama kacchurī sihla / kappura lāīai / mālaaṇḍhaṇa sāliṇja / taḥim bharu khāīai / phreṃkhaṇa khaṭa kareṇte / śuddhāśuddha ṇa muṇīai / niraṃsu aṃge cchaḍāvi / taḥim ja sarāva paṇīai / malaaje kuṇḍuru pāṭai ḍeṇḍima taḥim ṇa bājīai*〉は、成就者のグルが仰った歌であり、空と悲の無別の義を示す金剛歌なのである。他所で分別によってあれこれと縫い合わされた金剛歌ではない。金剛足歩の舞踏などは他所で知られて

いるからここでは開陳しない。この場では、儀軌どおり歌唱と舞踏などの次第がまさに加持されるであろう。その内、共の加持された標幟とは、すなわち、『二儀軌の王』の中で説かれている順番どおりに理解するのであって、「輪の自在者の前で、誰であれ恭しく歌唱と舞踏を為すことによる匂いの標幟は、最初は大蒜の匂い、次は、さらに禿鷲の匂いと樟脳と梅檀の匂いが加持された歌唱の標幟である。野鳴〔の鳴声〕と蜂の〔羽〕音が聞こえることで歌唱が優れている〔と分かるのである〕。ジャカル〔吠える〕声は〔ダーキニーが〕外境の近く〔へ来ていること〕の標幟である」⁶⁸〔と説かれている〕。

殊勝に加持された標幟は、すなわち、『金剛鬘』の中で、もし共の瑜伽女が聚会にやって来たならば、左手の身振の符牒（*chomā*）で樂の印契⁶⁹を作る。その者に修法者が会話と質問などの分別をするのは相応しくない。ほんの少しだけ尋ねたいときでも、何であれ金剛阿闍梨かまたは羯磨金剛者によって符牒と印契で質問がなされる。様々な姿をした瑜伽女が繰り返し往来する。その者に疑念を抱き驚愕し畏怖することなどを修法者はしてはいけないのであって、為せばまさしく悉地が損なわれる⁷⁰。

（7）残滓のバリ施与

次に、曼荼羅を撰集するときに〔生類に〕残滓のバリを与えるべし。すなわち、『金剛鬘』の中で、残滓のバリの施与によって成就の大瑜伽となる。「Om kṣi 残滓よ、土地守護神に、Svāhā」⁷¹。このマントラを唱えながら〔酒を〕口から霧にして撒くべし。

（瑜伽女の識別⁷²）

あるいは〔金剛〕阿闍梨が前に出ても、何者であるかが分からなければ、〔身体の〕特徴と結びついた標幟を瑜伽によって知るべきである。美しく丸い赭ら顔で、長い眉毛の女性は阿弥陀〔如来〕の部族と知るべし。その者には亀の印契を示すべし。

少し頑丈で目尻が長く、黄色がかった白色の魅惑的な女性であり、雑色の衣服を着て、額の三本の皺が標幟で、何処であれ住する諸々の土地で、町での死〔者〕などの噂話をするその女性こそが宝生〔如来の部族〕の瑜伽女にして吉祥なるダーキニーと見て、〔智者は〕三叉戟の印契を示す。〔さらに〕展左の舞踏の姿勢を相手の前で〔して〕見せるべきである。〔すると彼女は智者の〕手に左で与えてから⁷³、印契を巧みに示すのである。

色黒で黒い衣服を着て、巻髪で弓の形をした額を標幟の識別として示して、移り気な女性と分かる。〔その者には〕左〔足〕を引いて舞踏⁷⁴によって印契を巧みに示すべし。

〔その者は〕阿闍〔如来〕の部族と知る。〔彼女は〕左の姿勢で返答に応じる。頑丈な身体で腹部は少し垂れ下がり眼は大きくて睫毛は多く、こむらは太くて美しく、地下で成就した者⁷⁵と分かるのであり、毘盧遮那〔如来〕の部族と知ったならば、〔智者は〕その者に螺貝の印契を示すべし。

眼が乾いて、体毛がすべて逆立ち身体は痩せて手は長くダーキニーの語で呼ばれるこの女性は不空成就〔如来〕の部族と知る。〔智者は〕その者をよく見て最後に一回転して、左手を開いた飛幡の印契を示すべし。この者たちのことを適切に智者は努めてよく知るべし。質問したり印契を作るときには、その相手によって〔区別して〕供養すると語られる。

（聚会の区別）

何であれ以上の諸所作のすべてについて、男性勇者だけで為すことは男性勇者の饗宴（*vīraḥojya*）と言われる。〔その場合でも〕聚会の自在者〔だけ〕はそうではない。同

様に、女性勇者だけで〔為すこと〕は、まさしく女性勇者である自在者の饗宴 (*virābojya*) である。このように輪の自在者は、般若〔もしくは〕方便を伴った者である。さらに、何であれ肉と酒と体液〔を具えた集会〕だけが〔聚輪と呼ぶに値する〕。聖者ヴァジラパーニパーダが、「〔聚会が〕肉と酒と体液を具えていなければ徳性と福德が損なわれる。導師である聚会の自在者は特別に般若母を左に置くべし」⁷⁶〔と仰っておられる〕。この場で適切な資具と可能な限りの次第で五〔仏〕を自性とする曼荼羅などを清浄なる儀軌で供養する。全員が自らの瑜伽によりこの場で善行を願うならば、清浄なる本尊瑜伽によって弟子は聚会の瑜伽に習熟した内の自在者となるのである。すなわち、不断に深く習熟するが故に、いかなる時もこの儀軌によってこの次第を吟味すれば、不断の習熟により有戲論（戲論 *prapañcatā*）と無戲論（*niṣprapañcatā*）⁷⁷を建立するのである。

3) 随行

次に、修法者は漱口水を頂礼した後で、〔聚輪を転じた〕場所に献じるべし。〔五欲〕徳（五妙樂）などで喜ばせるべし。自らの本尊の輪自体が先ず解かれて、その後で福德を回向すべし。〔聚輪で違犯した過誤に〕堪忍を懇願した上で、聚輪を選着させるべし。自身が〔輪の〕自在者となっている者の場合は、他の者に頂礼する必要はない。この儀軌の次第どおりに適切に精進するならば、その福德の辺際は量りしれないのである。以上のように、〔当儀軌は〕ヴァジラパーニの教説に随順するものとなる。

2 奥書

「聚輪儀軌如意宝珠」と名づけるパండిタのラトナラクシタがお作りになったものを竟る。

東インドのパండిタであるラトナラクシタ御前とチベットの訳経師で釈子比丘にして持金剛者 Grub pa dPal bzang po が翻訳した。

6 考察

「ヴァジラパーニの教説に随順する」と語られるとおおり、『聚輪儀軌如意宝珠』中にヴァジラパーニの名は 4 回も挙げられている。この人物はマイトリーバ (*Maitrīpa* 別名 *Advayavajra*, b.1007or 1010) の四大弟子の一人であり、ネパールに住してチベットにも巡錫している⁷⁸。彼の著作の奥書に出る尊称からも、ヴァジラパーニがチベット人たちの間で大きな影響力をもったことが分かる。

Mahāvajradharastotra (Toh 1126) 「尊称欠」

Ṣaḍaṅgayoga-nāma (Toh 1364)、「秘密〔真言の〕上首・十地の自在者である菩薩」

Laghutantrapiṇḍārthavivaraṇa-nāma (『チャクラサンヴァラ註釈』)「大菩薩」

Tattvagarbhasādhana-nāma (Toh 1426)「十地に住する菩薩」

Nīlambaravajrapāṇīyakṣamahārudravajrāgnijihvatantṛṣṭi-nāma (Toh 2166)「大阿闍梨・聖ヴァジラパーニの悉地を獲得し、そのお身体に化作できる〔お方〕」

Vajrapada-nāma (Toh 2255)「金剛阿闍梨」

Bhāvanākramaṣaṭka-nāma (Toh 2299)「第二の仏の如くに称された〔お方〕」

Guruparaṃparakramopadeśa-nāma (Toh 3716) (『尊師相承次第要訣』)「大阿闍梨」

Bhagavatīprajñāpāramitāhṛdayatīkārthapradīpa-nāma (Toh 3820)「パండిタ」

彼の著作中、『尊師相承次第要訣』は、インド仏教の三乗を概説した綱要書である。これまで、そこで述べられている哲学的見として、師匠アドヴァヤヴァジラに由来する中観の二区分、Māyopamādvayavādin、Sarvadharmāpratiṣṭhānavādin が注目を引いてきた程度で、

金剛乗の大阿闍梨としてのトータルな理解は興味の範囲外におかれてきたと言える。世尊に認知された金剛乗のリーダー（金剛手菩薩）であるとの自負が見え隠れし、インド仏教全体を鳥瞰しその将来を憂うヴァジラパーニの肉声が聞こえるのが『チャクラサンヴァラ註釈』である。同書はアバヤーカラの *Āmnāyamañjarī* と似た金剛乗の百科全書とも言える体裁をもつ。ヴァジラパーニ自身は、『チャクラサンヴァラ註釈』第11章⁷⁹を聚輪儀軌に当てている。当儀軌中の引用箇所からも分かりますとおり、ヴァジラパーニは聚会における「三種の阿闍梨」の中で、比丘である阿闍梨を最勝と主張する。また、聚輪とその姉妹儀礼である「勇者の饗宴」の性格規定を述べた上で、聚輪で必須とされる「酒と肉と体液の享受」の内の最後のものを欠く「勇者の饗宴」儀礼を聚輪の下位に置く。この「勇者の饗宴」をヴァジラパーニは男女のシンメトリカルな集団構成と所作をもつ男女対で打ち出している。この思想が偶然でないことは彼が、*Guruparamparakramopadeśa* 中の灌頂儀軌において、「男性 (*bhṭṭāraka*) の秘密灌頂」「女性 (*bhṭṭārikā*) の秘密灌頂」と男女別の取り扱いを出すことから理解されよう⁸⁰。具体的には、性瑜伽から生じた体液を両性が別個に相手の秘処から舌で摂受するのである。非対称性が当然の前提であり、女性は男性瑜伽者のパートナーとしてしか扱われないかに見える金剛乗の典籍中で、このように女性の立場が明記されること自体が異例と言えよう。

さて、当儀軌におけるタントラの引用回数は、『金剛鬘』(10) 『サンヴァローダヤ』(3) 『ヘーヴァジラ』(2) 『サンブタ』(2) 『大印明点』(2) 『瑜伽女の普行』(1) である。ラトナラクシタが『金剛鬘』を重視していることは明らかである。金剛乗の行に関して言えば、聖者流のアーラヤデーヴァ (*Āryadeva*) が『行合集灯』(*Caryāmelāpakapradīpa*) 中で述べるように、『秘密集会』自体は、「無戯論の行」「極無戯論の行」は説いても、聚輪を典型とする「戯論の行」は説かないタントラである⁸¹。しかし『金剛鬘』は、「ツォンカパが、これを父母両タントラに共通する積タントラとみなしているように、その内容は母タントラ的な色彩を多分にもっているという点に特質がある」⁸²。『金剛鬘』第六十二章のタイトルはまさに「聚輪供養と瑜伽女と交わる章品」であり、ラトナラクシタが同章から多く引用することは自然である。それにしても、インド撰述の数ある聚輪儀軌に『金剛鬘』が引用されることは稀である。援用された文言も現行の『金剛鬘』(*Sujanaśrījñāna* と *Zhibā'i 'od* 訳) のものとかかなり異なっている。さらに、引用された全ての典籍の文言が現行の大蔵経のものと同様に異なることも含めて、当儀軌作成に際し我々には分からない何らかの問題があったのかも知れない。

次に、当儀軌の構成について第一に述べたいことは、科文の作成が困難なことである。「1 聚輪の方規」中で、最初に「1. 集会者の定義」を説いて、「2. 時の定義」「3. 場所の定義」に移ったにもかかわらず、改めて「拒否すべき集会者の定義」が説かれる。また、「4. 儀軌」の「1 前行」の中で、本来は「1. 集会者の定義」で説かれるはずの「羯磨金剛者の定義」が出る。さらに、「2」正行(7) 残滓のバリ施与」の後に、唐突に「瑜伽女の識別」「聚会の区別」の説示が出る。この二つの内、前者の出現は時系列に従って進行する所作の集積である儀軌にとって適切とは言えず、後者は自己言及的な「メタ儀軌」と言えるものであろう。従って、当儀軌は内容的・価値論的には幾分、豊富になっているとしても、単純に儀礼指南書・マニュアルとしての観点からすれば、ドーンビヘルカの『聚輪儀軌』⁸³などと比較して過剰の故に体裁を欠くテキストであると言えよう。

第二は、「正行」における「歌舞供養」がヘーヴァジラタントラ第二カルパ(集一切儀軌品)に出る金剛歌に基づいて構成されていることである。金剛歌のこの箇所は、ダーキニー女尊の顕現とそれによって集会が加持されたことの証拠とされる。言い換えると歌舞飲食で高揚した聚会で集团的催眠状態になった参加者に了解性的変容が生じていることを意味している。「大蒜の匂い・禿鷲の匂い・樟脳と梅檀の匂い」の知覚は嗅覚変容である。「野鴨〔の鳴声〕・蜂の〔羽〕音・ジャッカル〔の吠える〕声」は聴覚変容である。こうし

た集会者の了解性変容の背後で、インド亜大陸先住民の豊穡儀礼にまで遡り得るダーキニー女神の重層した共同観念が働いていると考えてよい。

聚輪に限らず一般的に集団的修法なるものは、外部からの客人を迎えて歓待し自らも楽しんだ後に客人を送り返すことを骨格とする。この基本的性格に古今東西の変わりはない。インドの諸宗教が編み出した諸儀礼も例外ではない。その過程の所作の意識的構成が儀軌次第となる。

ところで、筆者が『ガナチャクラの研究』で論じたごとく、『真実撰経』（『初会金剛頂経』）「降三世品」の作者を嚆矢として、『ヘーヴァジラタントラ』「説密印品」の作者・Caṇḍamahāroṣaṇatantraの作者へと続く金剛乗の信解者たちがヒンドゥータントリズム（特にシヴァ教）に対して憎悪と敵愾心を剥き出しにして憚らないのは明らかである。その観念に立って、金剛乗の徒が構成した集団的修法（戯論の行）である聚輪の思想的独自性を考えた場合はどうなるであろうか。筆者にはそれは、アパブランシャ語で書かれたこの金剛歌および「バラモンと犬とチャンダーラは本性が同じとして食すべし」という「有情平等の偈頌」等が中核に据えられていることだと考える。この問題のさらなる追求は他日を期したい。現時点では、この金剛歌の説示をラトナラクシタはダーキニーによる「共の加持された標幟」と位置づけることに注意しておきたい。

第三は、この金剛歌で説かれる「共の加持された標幟」に続く項目が「殊勝に加持された標幟」であり、その内容は金剛阿闍梨（または羯磨金剛者）に限定された聚会の指導者と金剛界五仏を具現する「聚会にやって来る瑜伽女」との交流であり、聚会の一般参加者はその一部始終を観察している。このトピックは、サンヴァラ系文献および「後期ヘーヴァジラタントラ群」で展開したものであり、その思想的意味の検討は他日を期し、ここでは、ラトナラクシタが聚会が加持された標幟を「共」と「殊勝」に下位分類していることのみを述べておきたい。

おわりに

インド仏教は声聞乗・波羅蜜乗・金剛乗の全体を通して三学（戒・定・慧）を契機としてもつ。金剛乗に特化すれば、波羅蜜乗とは不共な見(*dr̥ṣṭi*)が「慧」に、修習(*bhāvanā*, 観想)が「定」に、遵守すべき行儀・生活規範・修行の実際の営為のすべてを含む三昧耶である行(*caryā*)が「戒」に相当しよう。

大乘という構成的枠組は保持しつつも、金剛乗が波羅蜜乗とは峻別する形で乗としての自立を宣言したのが『真実撰経』である。その「四大品」からあまり遅れることなく作成される「教理分」において、聚輪（聚会曼荼羅）は「秘密曼荼羅」(*guhyaṃaṇḍala*)の名称をとって現れる。『理趣広経』（『吉祥最勝本初』）には、聚会曼荼羅(*gaṇamaṇḍala*)の語が出る。聖者流は戯論・無戯論・極無戯論からなる「行の体系」を案出し、聚輪を「戯論の行」の典型として位置づける。三学の「定」のカテゴリーが精緻な修道論を展開すると平行して、「戯論の行」の方向では、灌頂儀礼・聚輪儀礼を始めとする外的所作を伴う大衆参加の修法が儀軌に纏められる。そこでは、聚輪は祝宴であり同時に修法でもある大衆集会に変貌している。筆者は、インド仏教滅亡の時期にネパールとチベットで足跡を残した「真言阿闍梨」ラトナラクシタの著作から聚輪儀礼の姿を垣間見ることができたものと信じている。

略号

梵語仏典の研究：梵語仏典の研究（IV）密教経典篇，平楽寺書店，1989。

BA: 『青冊史』

SPS: Śata-piṭaka series

参考文献

一次資料

- 『行合集灯』: Pandey, J. S. (ed.) *Caryāmelāpakapradīpa of Āryadeva*, Rare Buddhist Text Series 22, Central Institute of Higher Tibetan Studies in Saranath, 2000.
- 『七教勅』: Templeman, D. (tr.) *bKa' babs bdun ldan gyi brgyud pa'i rnam thar, Ngo mtshar rmad du byung ba rin po che'i khungs lta bu'i gtam*, Library of Tibetan Works and Archives, Dharamsala, 1983.
- 『青冊史』: 'Gos gZhon nu dpal. Deb ther sngon po, *The Blue Annals*, ŚPS vol.212.
- 『ターラナータ仏教史』: Schiefner, A. (comp.) *Tāranāthae de Doctrinae Buddhicae in India Propagatione*, Sankt Petersburg, 1868.
- 『チャクラサンヴァラ註釈』: Cicuzza, Claudio, (ed.) *The Laghutantraṭikā by Vajrapāni*, SOR 86, Istituto Italiano per l'Africa e l'Oriente, Rome, 2001.
- 『ヘーヴァジラ』: Snellgrove, D.L. (ed.) *The Hevajra Tantra A Critical Study*, London Oriental Series 6, Oxford University Press, 1959.
- 『プトゥン聴聞録』: Bla ma dam pa rnam kyis rjes su bzung ba'i tshul bka' drin rjes su dran par byed pa, *The Collected Works of Bu ston*, ŚPS. pt.26 (La)
- 『サンヴァローダヤ』: Tsuda, S. (ed.) *The Saṃvarodaya Tantra Selected Chapters*, Hokuseido, 1974.

二次資料

- 桜井宗信 『インド密教儀礼研究: 後期インド密教の灌頂次第』法蔵館, 1996.
- 静 春樹 「聚輪儀軌 Gaṇacakravādhī 考」『密教文化』199.200, 1998.
「プトゥンと『アバヤの聚輪儀軌』について」『高野山大学大学院紀要』5, 2001.
「〈勇者の饗宴〉儀礼と金剛乗の比丘」『密教文化』214, 2005.
『ガナチャクラの研究: インド後期密教が開いた地平』山喜房佛書林, 2007.
- 種村隆元 「Saṃvarodayatantra 第21章 Caryānirdeśapaṭala に関する一考察: Padminī 第21章校訂テキスト並びに註」『密教学研究』41, 2009.
- 津田真一 「瑜伽女 Lāmā の sañcāra」『印仏研』23-2, 1975.
- 寺本婉雅 (訳註) 『ターラナータ印度仏教史』国書刊行会, 1977 (1928)
- 戸川昌彦 「ベンガルのバウルとインド密教: ラロンの歌における詩的表現を通して」『高野山大学密教文化研究所紀要』21, 2008.
- 中山照玲 「インド仏教終焉のころ」『成田山仏教研究所紀要』17, 1994.
- 羽田野伯猷 「Kaśimīra-mahāpaṇḍita “Śākyasībhadra” チベット近世仏教史序説」『チベット・インド学集成』第一巻, 法蔵館, 1986a.
「カーダム派 (Bka'-gdam-pa) について: Vinayadhara との交渉」『チベット・インド学集成』第一巻, 法蔵館, 1986b.
A Historical Study in the Problems Concerning the Diffusion of Tāntric Buddhism in India 『チベット・インド学集成』第三巻, 法蔵館, 1987.
- 松長有慶 『密教経典成立史論』法蔵館, 1980.
- Chattohadhyaya, A. (tr.) *Tāranātha's History of Buddhism in India*, Indian Institute of Advanced Study, 1970.
- Davidson, R. M. *Tibetan Renaissance: Tantric Buddhism in the Rebirth of Tibetan Culture*, Columbia University Press, New York, 2005.
- Rhoton, J.D. (tr.) *A Clear Differentiation of the Three Codes*, State University of New York Press, Albany, 2002.

Roerich, G.N. (tr.) *The Blue Annals*, Delhi: Motilal Banarsidass, 1976 (1949)

Templeman, D., *The Seven Instruction Lineages*, Library of Tibetan Works and Archives, Dharamsala, 1983.

¹ Toh 1420, Ota 2137.

² アバヤーカラに随順する学匠たちについて『七教勅』には以下のように出る。[Templeman: 73~74]
アバヤーカラは、チベットでは dGe ba'i 'byung gnas で知られる Subhākaragupta に教授した。彼は Daśabāla に教授した。彼は Vikīadeva に教授した。（中略）Vikīadeva はカシミール人 Śākyaśrībhadra および Buddhaśrībhadra と Ratnarakṣita に教授した。

次に、ラトナラクシタがアバヤーカラに繋がる相承を『ブトゥン聴聞録』で見る。

1) サンヴァラ・アビダーナタントラ、ヘルカ現生タントラ、ダーキニー普行タントラおよび阿闍梨 Koṅkadatta がお作りになった白ヴァーラーヒー成就法 (32a7-b1)

成就者 Koṅkadatta ----Subhākaragupta----Ānandākara----Ratnarakṣita (後略)

2) Mi g'yo bla na med タントラ (32b5-6)

rdo rje 'chang----phyag na rdo rje----Anupamarakṣita----Sādhuputra----

'Od byed lha----Abhayākara----Subhākaragupta----Ānandākara---- Ratnarakṣita (後略)

3) 'Gro mgon chos rgyal の聴聞録におけるヘーヴァジラの流儀 (56a5-6)

Abhayākara---- Subhākaragupta----Ānandākara---- Ratnarakṣita (後略)

³ [Schiefner:191~194] [Chattopadhyaya : 316~320] [寺本: 338~343]

⁴ [戸川: 141~160]

⁵ BA Pha.23b2-4., BA p.1057.

⁶ BA Ta.b1-7., [Roerich: 726]

⁷ [Davidson: 348] はその状況を次のように記す。

12c 最後の四半世紀と 13c 最初の四半世紀に蔵 (Tsang) 地方はインド人比丘たちで溢れかえっていたのである。これはシャーキャシュリー、Vibhūticandra、Sumatikīrti たちがチベットの西方や南方を巡錫し、Grags pa rgyal mtshan がサキヤの地で彼らの多くを世話する機会をもった時のことである。彼はインド人比丘たちの逗留を自らの学習に役立て、密教典籍に関しては、チベットへ難を逃れたインド人比丘たちから人生の後半に伝授を受けたのである。

⁸ ラトナラクシタは大衆部の比丘であったことがチベットの地に影響を残す上での大きな枷となったのではなからうか。[Davidson: 110~111] が論じるように、有部律を奉じる「好戦的な」律教団の強固なネットワークは、時代を遡って 11c 中葉に、大衆部で受戒したアティシヤが風穴さえ穿つことの出来ない堅固な壁であった。

⁹ śrī-Saṃvarodayamahātantrārājasya padminī-nāma-pañjikā の skt. Mss. の書誌的情報については『梵語仏典の研究』 pp.257~258, [種村 2009]

¹⁰ BA の著者は同書および Chag 訳経師について次のように述べている。

Saṃvarodaya [tantra] について、ラトナラクシタが註釈書をお作りになった。Chag 訳経師もこのお方の直弟子だったので、彼は [この] 註釈の文書を所持していたのではないと思われる。
(Ja.17a3., BA p.389)

¹¹ デルゲ版で僅か半葉の短いテキストであり、「王侯が行う聚輪」「一般人が行う聚輪」「瑜伽者の次第で行う聚輪」の三種の区別を説く。

¹² BA Nya.19b3-20b4., [Roerich: 445~448]

¹³ [Rhoton: 12]

¹⁴ BA Nga.4a7., [Roerich: 211]。伯父の客死もあってか、サバンは祖父と父に反対されてインド留学の夢破れたことを晩年になっても悔やんでいる。[Rhoton: 206]

¹⁵ 'phags pa zhabs については不詳。

¹⁶ この人物については不詳。

¹⁷ [静: 2005]

¹⁸ Toh 1420 Wa.2b3-5.

¹⁹ [桜井: 284, 419]

²⁰ Toh 1420 Wa.3b7-4a3.

²¹ Toh 1420 Wa.4a7-b1.

²² ヴァジラパーニの「四印」論は、「世間・出世間」「俗諦・勝義諦」の枠組と整合させ、大印 (mahāmudrā) を成就するに業印・智印を捨てる必要性を説く。『チャクラサンヴァラ註釈』 p.124

²³ [桜井: 212]

- ²⁴ Toh 1420 Wa.17a6-b1.
²⁵ Toh 1420 Wa.24b2-4.
²⁶ Toh 1420 Wa.43a2-3.
²⁷ Toh 1420 Wa.46a6-b1.
²⁸ Toh 1420 Wa.73a3-4.
²⁹ Toh 1420 Wa.99a2-5.
³⁰ 『チャクラサンヴァラ註釈』 p.158
³¹ かつての精緻に構成された「大乘仏教在家起源説」は、「声聞」(*śrāvaka*)と「比丘」(*bhikṣu*)の外延をイコールとする論理的誤謬に立つものであった。所謂「仏教・密教」の二分法ではなく、インド仏教が声聞乗・波羅蜜乗・金剛乗をもったことが理解できておれば、金剛乗の比丘の存在から、このような誤謬は避けられたはずである。
³² 『梵語仏典の研究』 pp.259~260, Toh 381, Ota 26.
³³ Toh 1198, Ota 2328.
³⁴ [静 2001]
³⁵ 『サンヴァローダヤ』 p.99(25)(26).
³⁶ 『サンヴァローダヤ』 p.100(28).
³⁷ Wa.30a1-b3.
³⁸ 『サンヴァローダヤ』 p.102.
utsrṣṭabali saṃhāraṃ bhūtam ucchuṣma dāpayet /
³⁹ 『有蓮華』は施主と聚輪メンバーの関係を以下のように説く。 Wa.99a4-5.
sbyin pa'i bdag pos yon la sogs pa phul te / dkyil 'khor gyi dbang phyug dang dkyil 'khor pa rnam
kyis 'dus nas / de'i ched du dge ba'i bkra shis bya ste / sbyin pa la sogs zhes pa tshigs su bcad pa 'di yis
so //
⁴⁰ Wa.32a1-5.
⁴¹ Toh 381 Ga.155a3-4.
tshogs kyi 'du ba bzang po nyid // lha mo skal ba chen mo nyon //
'dod pa'i don kun sgrub pa mo // gang du zos pas 'grub 'gyur ba //
⁴² Toh 445 Ca.267a3
⁴³ Toh 445 Ca.267a3-4.
rnal 'byor che dang lhan cig tu // sgrub pa'i phyir ni yang dag gnas //
phyag rgya brda ni yongs shes shing // de dang dam tshig la ni 'jug //
⁴⁴ この箇所が説く「殊勝な方規」は同内容が『金剛鬘』Ca.267a4-6に見られる。
⁴⁵ 『サンヴァローダヤ』 p.97.
ācāryapūrvamgamam krtvā vartayet maṇḍalam śubham // (6)
⁴⁶ 『金剛鬘』第54章の章名は *cho ga nyi shu'i las rgyas pa*, 第55章は *cho ga nyi shu pa'i rgyu mtshan dang 'bras bu bstan pa*
⁴⁷ テキストに出る *bya ba nyi shu'i dbye bas ni // bla ma'i cho ga bya ba nyid //*を『金剛鬘』の当該箇所
の *cho ga nyi shu bya ba bslabs // de ni bla mar mngon par brjod //*で読む。
⁴⁸ Toh 445 Ca.271a7-b4.
⁴⁹ 出典箇所不明。
⁵⁰ 『チャクラサンヴァラ註釈』 p.106, Toh 1402 Ba.116a1-2.
tad evācāryapramukhaṃ kartavyam upāsakaiḥ / ācāryo 'pi mantranaye trividhaḥ /
grhasthaś cellako bhikṣur adhamamadhyamottamaḥ // iti //
⁵¹ 『有蓮華』第32章は聚輪を転じる頻度を以下のように説く。 Wa.99a4.
nyin re zhes pa 'byor na tshogs kyi 'khor lo nyi ma so sor ram zla ba so sor bya ste / ma 'byor na yang lo
re re la gdon mi za bar bya'o //
⁵² Toh 420 Na.86a2.
gsang ba mchog gi dgyes pa yi // de ru 'khor lo rab tu bskor //
⁵³ 引用箇所は『金剛鬘』中に不明。
⁵⁴ Toh 373 Kha.273b7-274a2.
sa yongs brtags pa'i gnas su ni // slob dpon sngon du 'gro ba yis //
rgan dang gzhon pa'i dbye ba bzhin // zhugs nas gdan la gnas par bya //
skal ba med dang nga rgyal can // de bzhin bla ma smod pa dang //
dam tshig ma mthong rang gi bu // de bzhin skyes pa bud med rnam //
sgrub po dngos grub 'dod pa yis // dam tshig der ni gzhus mi bya //
gal te phyugs ni de rnam zhugs // dngos grub ring du 'jug par 'gyur //
dam tshig smad pas lus sems ni // sdug bsngal de bzhin gnas nyams dang //
dpal las ring zhing sna tshogs pa'i // sdug bsngal gyis ni nyer 'tsher 'gyur //
⁵⁵ Toh 373 Kha.274a4-5.
gtsang zhing dul dang dpa' ba'i sems // sred dang gti mug rnam par spangs //
thams cad mtshungs par lta ba ni // las kyi rdo rjer rab tu brtag //
⁵⁶ Toh 445 Ca.268a4.
gang phyir rang nyid rdo rje sems // las kyi rdo rje gzhan dga' min //

- ⁵⁷ テキストの mi dmigs を『金剛鬘』の相当箇所に出る rgun 'brum で訳した。
- ⁵⁸ Toh 381 Ga.155a6-7.
de ltar bza' ba sna tshogs dang // chang dang nya dang yang dag ldan //
dga' ba'i longs spyod skal bzang bas // dpal ldan rdo rje sems dpa' 'grub //
a mra smin dang pa na sam // rgun 'brum nā ri ke la dang //
ā lu ka la sogs pa ni // 'bras bu sna tshogs tha dad pa //
tshogs kyi dkyil 'khor dbul bar bya //
- ⁵⁹ 『チャクラサンヴァラ註釈』 p.108, Toh 1402 Ba.117a7.
tato madyādikaṃ śodhayitvā bodhayitvā pradīpayitvā amṛtīkṛtya balyādikaṃ datvā pūrvoktagulikayā
prokṣayitvā /
- ⁶⁰ Toh 420 Ōa.86b2.
bza' ba sna tshogs dang ldan pa'i // dang por gtor ma chen po ni //
- ⁶¹ 筆者はこの偈頌を「有情平等の偈頌」と名づけている。
- ⁶² gtam gyi rnyed pa の意味は不詳。
- ⁶³ smad ra (悪罵) の次の 'thog pa は不詳。
- ⁶⁴ Toh 445 Ca.267b3-4.
tshogs kyi 'khor lor gtam smra dang // rtsod dang de bzhin sgrub pa dang //
mtshil snabs dor zhing dgod pa dang // rkang pa la sogs rkyong ba dang //
yang dang yang du ldang ba ni // de la dus kun du mi bya //
- ⁶⁵ Toh 445 Ca.267b7-268a2.
padma'i lte ba'i dbus la ni // dpa' bo rnams kyi gdan du brjod //
gal te dpa' bos ma shes na // dpa' bo don gyi mtshan nyid rnams //
dngos grub thams cad stsol ba yi / 'khor lo de yi 'bras bu med //
de lta'i 'bras bu cung zad gang // phyi nang bdag nyid yang dag spyod //
de yis rnam dag dngos grub 'gyur // tshogs kyi 'khor lo'i 'bras bu ster //
- ⁶⁶ 『ヘーヴァジラ』 p.62(10)-(11), Toh 418 Ōa.19b7.
ābhyāṃ gītanāṭyābhyāṃ gīyate nṛtyate paraṃ /
gaṇarakṣā tv anenaivātmarakṣā tathaiva ca /
anenaiva vaṣaṃ loka mantrajāpaṃ tv anena tu /
- ⁶⁷ Toh 445 Ca.268a5.
shin tu dga' ba yang dag skyes // bka' bsgo gar gyi spyod pa bya //
rdo rje bcing ba de yang bya // lha rnams ji ltar mnyes pa nyid //
- ⁶⁸ 『ヘーヴァジラ』 p.64(12)-(13), Toh 418 Ōa.20a1.
gaṇādhyakṣaṃ puraskṛtyaṃ tatra ghrāṇan tu lakṣayet /
laśunaṃ prathamam gandham ḡḡdharagandham tataḥ punaḥ /
karpūraṃ mālayajam tadanu gītādhiṣṭhānam lakṣayet /
rutam haṃsasya bhṛṃgasya śrūyate gītaśeṣataḥ /
gomāyor api śabdañ ca bāhyodyāne tu lakṣayet /
- ⁶⁹ Toh 1251 Prajñendraruci 作 Ratnajvalasādhana, Ōa.235a4-5.
gang zhig spun dang sring mo yang // the tshom med par nram par shes //
gang gis sor mo gcig ston pa // 'ongs sam zhes ni 'di ba yin //
gnyis ni legs par 'ongs pa yin // mthe bong g'yon pa bcangs pa ni //
bde ba'i phyag rgyar shes par bya //
- ⁷⁰ Toh 445 Ca.268a2-5.
'dul ba'i mkha' 'gro ma 'ga' zhig // sems rtog med pa'i phyr 'ongs nas //
de la de tshe smra ba yang // sgrub pa pos ni mi bya zhing //
tshigs tsam gyis ni lan mi gdab // bde bar 'ongs sam phyag rgyas bya //
de la cung zad bya smra gang // slob dpon rang nyid kyis ni bya //
yang na bya ba thams cad ni // las kyi rdo rjes yang dag sbyar //
gang phyr rang nyid rdo rje sems // las kyi rdo rje gzhan dga' min //
sna tshogs gzugs kyi rnal 'byor ma // yang dang yang du dgug par bya //
de la g'yo ba'i spyod pa med // slob dpon dpa' bo bzhin du spyod //
gang yang skyon gyi spyod pas ni // de yi lus ni ltung bar 'gyur //
- ⁷¹ Toh 445 Ca.261b6-7. de nas lhag ma'i gtor ma sbyin // 'khor lo lhag par 'byung ba'i rim // (後略)
- ⁷² Toh 445 Ca.268a7-b6 で「瑜伽女の識別」は以下である。
gang gis gdong ni 'bar ba'i 'od // zlum zhing 'jam la mdzes pa dang //
smin ma ring bde shes bya // 'od dpag med kyi rigs las byung //
de las padma'i phyag rgya bstan // rus sbal phyag rgya lan yin no //
mchu rle mig dkyus ring ba dang // kha dog ser mo yid 'phyog ma //
'di yi dpral bar ri mo gsum // ji srid sgra mtshams par du gnas //
g'yul du 'chi ba rnams kyis ni // gtam dag la ni rab tu nyan //
'di 'dra'i nyam pa ma mthong nas // mdung gi phyag rgya bstan par bya //
rkang pa g'yon pa bskum pa dang // de ni gar byed rab tu ston //
g'yon pa yongs su bskor nas ni // phyag rgya'i lan ni bstan par bya //
sna tshogs pa yi gos la dga' // rin chen 'byung ldan rigs las byung //
kha dog gnag cing gos kyang gnag // skra ni 'khyil cing dar gyis bcings //

dpral bar gzhu yi rnam pa yi // de 'dra'i mtshan ma mthong na ni //
 rtag tu de yi sems g'yo ba // ma mo zhes ni rab tu grags //
 dil bu'i phyag rgya bstan par bya // de yi g'yon pas phyag rgya ston //
 mi bskyod rigs las byung bar shes // mtshan mo 'ongs nas 'gro ba mchog //
 thung du lto sbom kha dog dkar // byin pa sbom zhing shin tu mdzes //
 sa spyod mar ni shes par bya // dung gi phyag rgya lan yin no //
 rnam par snang mdzad rigs las byung // mig yangs rdzi ma stug pa dang //
 yan lag kun la ba spus khyab // sngo bsangs mig ni mar ba dang //
 yan lag phra zhing dpung pa ring //de ni mkha' 'gro ma ru grags //
 don yod grub pa'i rigs las byung // de 'dra ba ni rab mthong na //
 ba dan gyi ni phyag rgya dang // g'yon pa'i phyag rgya lan yin no //

⁷³ lag tu g'yon pas byin nas ni の意味は不詳。

⁷⁴ dge ba'i gar の意味は不詳。

⁷⁵ sa 'og grub pa の意味は不詳。『金剛鬘』では sa spyod ma (Bhūcarī) と出る。

⁷⁶ 『チャクラサンヴァラ註釈』 pp.105~106, Toh 1402 Ba.115b7-116a1.

sāmānyam gaṇacakram deśakulavyavahāreṇa kartavyam puṇyasambhārtham svagrhe paripācitābhiḥ
 kulavadhūbhiḥ / anyathā gaṇacakram na bhavati / prajñopāyasukhena vinā maithunabodhicittāsvādanena
 rahitaṃ khānapānena kevalena vīrabhojyam ucyate na gaṇacakram /

⁷⁷ 無戲論の行については [静 2007] の「インド後期密教における〈行の体系〉」参照。ラトナラク
 シタが『有蓮華』で無戲論の行を述べている箇所については [種村 2008]。ヴァジラパーニも『尊
 師相承次第要訣』において「三種の行」を簡単に述べている (Toh 3716 Tsu.182a5)。

⁷⁸ BA Da.2b6-7 [Roerich: 843], BA 8b3-9b3 [Roerich: 855~858]

⁷⁹ 『チャクラサンヴァラ註釈』 pp.105~109, Toh 1402 Ba.115a7-118a1.

⁸⁰ Toh 3716 Tsu.173b6-7.

de la gsang ba' dbang la gnyis te / rje btsun gyi gsang ba'i dbang dang / rje btsun ma'i gsang ba'i dbang
 ngo // rje btsun gyi gsang ba'i dbang ni byang chub kyi sems rdo rje las lces blang bar bya'o // rje btsun
 ma'i gsang ni byang chub kyi sems padma nas lces blang bar bya'o //

⁸¹ 『行合集灯』 p.82.

asmin śrīguhyasamāje tu kevalam niṣprapañcatā, atyantaniṣprapañcacaryā ca nirdiṣṭā, adhunā
 prapañcatācaryā śrīsarvabuddhasamāgamayogaḍākinijālasamvara-mahāyogatantrād avatāryate /

⁸² [松長: 289]

⁸³ Toh 1231 Nya.43a1-45a1., [静 1998: 289~301]

キーワード

ラトナラクシタ ガナチャクラ (聚輪) 金剛乘 金剛鬘タントラ

ラトナラクシタ『聚輪如意宝珠』テキスト

0 敬礼文と総義の開示

(D.249a1L1)(P.309b2L2) rgya gar skad du / ga ṅa tsakra bi dhi tsinta ma ṅi nā ma / bod
 skad du / tshogs kyi 'khor lo'i cho ga yid bzhin nor bu zhes bya ba /
 'phags ma sgrol ma la phyag 'tshal lo //
 mchog dang thung mong kun gyi gzhi // lam dang dngos grub mthar phyin pa //
 rgyud las gsungs pa'i cho ga bzhin // de¹ 'dir bsdus te brjod par bya //
 dam tshig nyams pa'i skyon sel cing // mi mthun phyogs rnam 'joms byed pa //
 'dod pa'i don kun sgrub pa nyid // lhag pa'i lha yang tshim par 'gyur //
 phyag rgya chen po'i dngos grub ni // myur du lung bstan thob par byed //
 tshogs kyi 'khor lo'i cho ga yi // rim 'dis 'dod pa'i 'bras bu 'byin //
 ji ltar yang dag sbyor ba las // rab tu bshad kyis lha mo nyon //
 'dod pa'i don kun grub byed cing // dge ba'i tshogs la 'dud pa gang //
 zos pas dngos grub 'gyur ba nyid // de bzhin rdo rje phreng⁴ ba las //
 de nas gzhan yang bshad kyis nyon // tshogs kyi 'khor lo'i rim pa 'di² //
 gang zhig mchod pa bzhin du spyad // rang gzhan³ dngos grub nye ba nyid //
 'dir ni mgron dang dus dang ni // gnas dang rdzas dang bya ba'o //
 mchog tu gyur pa'i cho ga 'dis // gang zhig (P.309b) dngos grub mngon du 'gyur //

1 聚輪の方規

1. 集会者の定義 (1) 総説

de la tshogs kyi 'khor lo'i sgra // don ni dgos pa'i sgo nas te //
 mgron gyi rang bzhin bshad par bya // dpal ldan rdo rje phreng⁴ ba las //
 rnal 'byor chen po'i ting nge 'dzin // mnyam zhing gcig tu gyur byas nas //
 brda dang phyag rgya'i sbyor bar⁵ shes // dam tshig ldan pa 'jug pa'o //
 de la mang du 'dus pa'i⁶ tshogs // 'khor lo lha yi rim pa nyid //
 thun mong dus su bshad pa nyid // khyad par 'di yis shes par bya //
 thams cad du ni dam tshig gcig // rtog pa thams cad yongs su spangs //
 bla ma la gus ting 'dzin gnas // sbyin sogs yon tan rgyan spras pa'i //
 thabs 'dir⁷ tshogs kyi 'khor lo la // bgegs med par ni rab tu 'jug //
 gzhan du skyon dang bcas par 'gyur // thabs dang shes rab phan tshun du //
 yid 'phrog bya dang bya min mkhas // lo ni nyi shu lnga lon las⁸ //
 (D.249b) lhag pa yongs su spang bar⁹ bya // yongs shes thabs ni thams cad la //
 shes rab gcig gis bya ba min //

(2) 金剛阿闍梨の定義

'dir ni sgrub pa gcig pa yi // bla mas slob ma rjes su gzung //

ji skad *sdom pa 'byung ba las* // gang zhig dkyil 'khor dge bar 'gyur //
 slob dpon sngon du phyogs byas nas // slob dpon yon tan ma bsdams na //
 'jig rten pa yis dpyas par 'gyur // slob dpon med par gyur pa na //
 gzhan yang bla ma mtshan nyid ldan // 'khor lo'i dbang phyug byas pa nyid //
 gus pa gcig pa'i tshul gyis spyad // de yang *rdo rje phreng ba las* //
 zhi la¹⁰ sogs pa'i phrin las dang // sngags dang¹¹ sbyor ba'i cho ga shes //
 bya ba nyi shu'i dbye bas ni // bla ma'i cho ga bya ba nyid //
 sbyin dang tshul khirms bzod pa dang // brtson 'grus bsam gtan pha rol 'gro //
 nyin mtshan rtag par dge la (P.310a) spro // shes rab rno zhing bzo gnas mkhas //
 gnyis med yon tan gyis lci ba // 'di ni dpal ldan bla ma'o //
 nang du gsang ba 'dus la sogs // phyi ru nyan thos spyod pa can //
 man ngag rim pa'i khyad par gyis // ji ltar rigs pa'i spyod pa la //
 slob ma rjes¹² 'dzin ston pa dngos // de bzhin dkyil 'khor la sogs dang //
 mdo dang las kyi tshogs rnam dang // don dam pa yi bya ba mkhas //
 snang ba gsum la sogs pa la // rang gis goms 'gyur gzhan la ston //
 rnal 'byor rim pa'i slob dpon te // yid 'phrog *sdud pa*¹³ slob dpon no //
 de nyid bcu ni yongs su shes // dkyil 'khor 'dri ba'i las la mkhas //
 slob ma rjes 'dzin nus pa dang // gsang ba'i dbang gi mthar son pa //
 shes¹⁴ rab snying rje mtshungs par ldan // rgyud kyi rim pa'i sbyor ba mkhas //
 zab mo'i spyod pa rab ldan pa // 'di ni rdo rje sems dpa' dngos //
 ji skad Phyag na rdo rje yis // 'khor lo *sdom la 'gre*¹⁵ ba las //
 thun mong bsod nams bsag pa'i rgyu // ye shes dngos grub sgrub¹⁶ pa'i thabs //
 dge bsnyen pha ma la sogs pa // slob dpon dag la rab tu phyogs //
 gsang sngags theg pa'i cho ga 'dir // slob dpon rnam pa gsum yin la //
 (D.250a) khyim pa dge thsul dge slong ste // tha ma 'bring dang mchog yin no //
 sbyin bdag blo gros mi 'phel phyir // thun mong¹⁷ spang bya'i slob dpon ni //
 snying rje med cing khro ba dang // khengs shing chags la mi brtan pa //
 bsalab pas ma bsdams 'dod pa che // rang la bstod pa¹⁸ mi bya'o //
 khyad par khyim pa'i slob dpon ni // bud med bcas shing dkor¹⁹ zas dang //
 zhing las g'yog dang tshong pa dang // rmongs pa rnyed (P.310b) phyir chos smra ba //
 'di ni tshogs kyi slob dpon min // 'dir ni tshul khirms yon tan ldan //
 rnal 'byor dkyil 'khor la sogs pa'i // yon bdag zil gnon bkur ba'i gnas //
 'di nyid 'khor lo'i dbang phyug 'gyur // 'dis ni dkyil 'khor gtso bo dag //
 ma byas yon bdag bsod nams nyams //

(3) 三昧耶と律儀の同異

dkyil 'khor 'khor lo 'di nyid du // dam tshig sdom pa ma gcig na //
 'khor lo'i dbang phyug de yis ni // rnal 'byor bsdu bar mi bya'o //
 gzhan gyi rgyud kyi bsalab²⁰ byar mngon // gnas khang gzhan du mchod par bya'o //

'di nyid lung dang bcas pa'i phyir // bya ba don dang bcas par 'gyur //
 kha cig rnal 'byor rnal 'byor ma // sgom²¹ rim gzhan du gyur pa na // rnal 'byor lhag
 pa'i lha la mchod // de yi rjes su rim pa 'dis //
 skad cig byed pa'i rnal 'byor gyis // bsgrub bya de yi²² lha mchod pa //
 'di nyid yang dag mtshan nyid yin // tha dad so so'i rgyud dag gis //
 bslab pas grol bar 'dod pa la // brda yi rim pa so so yi //
 phan tshun dam tshig sbyor mi shes // 'khor lo'i cho ga nyams pa nyid //
 de rnams mgron gyi rnam gzhas²³ go //

2. 時の定義

de nas lha yi nga rgyal gyis // gong du gsungs pa'i rnal 'byor la //
 maṇḍala sngon du 'gro ba yis // sngags kyis mchod la²⁴ gsol ba gdab //
rnal 'byor kun spyod la sogs pa'i // 'khor lo sdom pa'i rgyud kyis ni //
 nag po'i phyogs dang dkar phyogs kyi // bcu pa la ni de rab mchod //
 yi dags zla phyed bcu bzhi dang // de bzhin du ni brgyad pa la //
 dpal ldan dgyes mdzad rdo rje mchod // dus kyi 'khor lo nya gnyis la //
 gsang ba 'dus pa zla re bzhin // lnga brgyad bcu dang bcu bzhi dang //
 de bzhin beo lnga nag (D.250b) phyogs la'ang // lnga ste (P.311a) dus ni bcu ru 'gyur //
 de dag dus kyi khyad par ro // 'dir ni rtag tu phun tshogs sam //
 ji ltar 'dod cing ji ltar nus // grub par nus na nyin re'am //
 lo zla kun du bya ba'o //

3. 場所の定義

gnas ni dben par gsang ba yi // 'khor lo rab tu bskor bar bya //
phyag rgya chen po thig le las // thams cad 'jigs pa spangs pa yi //
 skye bos dben zhing yid 'phrogs pa // grong ngam ldum ra nags tshol dang //
 dur khrod ri yi phug tu'o // dang po yid 'jug byi dor bya //
 dkyil 'khor rnam par me tog dgram // *rdo rje phreng ba'i rgyud* las ni //
 me tog sna tshogs bkram pa yi // gzhal yas khang gis rnam par spras²⁵ //
 de dag gnas kyi rnam bzhag go //

（拒否すべき客人の定義）

gang zhig dam tshig med par ni // bu la sogs pa'ang mi gzhus go //
 ji skad *sdom pa 'byung ba* las // yongs su grub pa'i gnas dag dang //
 gdan la 'jug par bya ba ni // rgan dang gzhon pa'i dbye bas der //
 slob dpon rjes su 'jug par bya // snod dang mi ldan nga rgyal che //
 bla ma'i skyon rtog shes rgyud rtsub // gong ma'i dbang gis ma smin pa //
 rang gi bu dang chung ma dang // de bzhin bran dang bran mor bcas //
 dngos grub 'dod phyir sgrub pa pos // dam tshig 'di dag gzhus mi bya //

de ltar 'di dag gzhug pa na // rmongs dang dngos grub ring bar 'gyur //
 dam tshig dral²⁶ gyur sdug bsngal zhing // de bzhin lus ngag yid kyis myong //
 gnas nas 'thon dang phun tshogs nyams // sna tshogs sdug bsngal myong ba nyid //
 sgrub pos 'di bzhin mchod pa'i yul // pha rol rnal 'byor dngos grub nyams //
 dam tshig med pa'i 'khor lo ni // nam yang bskor bar mi bya'o //

1) 前行

(1) 聚会処への入住

mched yul rnam par bzhag pa ni // tshul dang mthun pa'i gnas dag tu //
 snyan gsan phab pa'i rnal (P.311b) 'byor pa // slob dpon rjes su 'jug par bya'o //
 phyi ru rnal 'byor khrus byas nas // sgo dag skyong ba'i slob dpon la //
 tshigs²⁷ bcad 'di yis 'jug par bya // khro bo sngon po mdzes pa ste //
 khyod ni dam tshig yid du 'ong // nor bu rin chen spras pa yi //
 dbyug pa phyag na bsngams pa nyid // bdag (D.251a) ni 'khor ba las bsgral phyir //
 rnal 'byor tshogs kyi dbus dag tu // bzang po'i sgo ni phye nas su //
 dpa' bos gnang gis gtong²⁸ du gsol // nang du stan la rgan rim gyis //
 dkyil 'khor 'khor lo'i rim pa'am // yang na gral gyi rim pa'o //

(2) 金剛阿闍梨の本尊瑜伽

de nas slob dpon yon bdag gis // ri rab steng du skad cig la //
 gnas pa'i gzhag yas khang dkyil du // lhag pa'i lha yi gzugs su blta //
 dam tshig sems dpa'i rang bzhin la // ye shes sems dpa' gzhug par bya //
 argha dang ni zhal bsil²⁹ dang // bsang chu sngon du 'gro ba yis //
 me tog phreng ba spos la sogs // thun mong³⁰ gi ni mchod pa dbul //
 yon gyi bdag pos bstod pa bya // dpal ldan rdo rje mkha' 'gro ni //
 mkha' 'gro ma yi 'khor los sgyur // ye shes lnga dang sku gsum nyid //
 'gro ba skyob la phyag 'tshal bstod // ji snyed rdo rje mkha' 'gro ma //
 kun du rtog pa'i³¹ 'ching gcod cing // 'jig rten bya ba rab 'jug ma //
 de snyed rnam la phyag 'tshal lo // yod med rtog pa las grol zhing //
 'khor 'das rnam pa gnyis med pa // dpe med bde bas gang gyur pa'i //
 'khor lo'i dpa' bo la sogs bstod // 'dis ni mngon par brkyang phyag 'tshal //
 slob dpon rgyud kyi dbye bas der // ting nge 'dzin gyi³² rim pas ni //
 rang gi lha yi gzugs su 'gyur // ji lha'i rdzogs pa'i rim pa bsgom³³ //
 yon bdag yi dam gzhan yin na // (P.312a) sngon la rang gi yi dam ste //
 rjes la skad cig nyid la ni // yon bdag 'dod lha'i rnal 'byor bsgom //

(羯磨金剛者の定義)

rgyud las gsungs pa'i mtshan nyid can // las kyi rdo rje'i bya ba ni //
 ji skad bde mchog 'byung ba las // gtsang zhing zhi la blo gros ldan //

rmongs dang ser sna rnam par spang³⁴ // thams cad dang ni mthun par blta³⁵ //
 las kyi rdo rjer der rtog go // de bzhin rdo rje phreng ba las //
 khyod ni rang byung rdo rje sems // mtshungs med las kyi rdo rje nyid //

(3) 資具の準備

de nas sna tshogs ston mo dang // sha dang chang ni mnyam por sbyor //
 longs spyod yid 'phrog bde ba can // dpal ldan rdo rje sems dpa' mnyes //
 a mra³⁶ dang ni pa na³⁷ sa // mi dmigs³⁸ na ri³⁹ ke la (D.251b) sogs //
 'bras bu rnam pa sna tshogs pa // tshogs kyi dkyil du dbul ba ni //
 yang dag sbyor ba'i rgyud las gsungs //

2) 正行

(1) 曼荼羅成就と甘露奉獻

'phags pa Phyag na rdo rjes gsungs // ji ltar tshogs pa'i rnal 'byor la //
 bdud rtsi ri lu'i⁴⁰ chu yis bsang // sngon du gtor ma byin par bya //
 phyag rgya chen po'i thig le las // thog mar gtor ma chen po ni //
 sna tshogs pa yi bza' ba dang // btung ba dang ni ldan pa nyid //
 thog ma bar dang tha ma ni // lhag pa lha yi rnal 'byor gyis //
 gtor ma dbul bar bya ba ni // mdun du dri bzang sogs pas⁴¹ byug //
 dri yi⁴² thig les dkyil 'khor la // rang gi lha yi 'khor lo ni //
 cho ga bzhin du bskyed la mchod // dam tshig sems dpa' mkha' nyid las //
 ye shes sems dpa' dgug par bya // de yi rtsibs bcur khro bo bcu //
 srung⁴³ ba'i 'khor lo'i lte ba la // sgrub pa po yi lha nyid de //
 srung⁴⁴ ba'i 'khor lo'i phyi rol du // 'khor dang bcas pa'i phyogs skyong dang //
 zhing skyong dur khrod la sogs pa // ji ltar mngon rtogs sngags kyis ni⁴⁵ //
 skad cig gis ni rang gi lha // dkyil 'khor 'khor lo'i gzugs su blta //
 (P.312b) yum dang bcas pa nyid du bsgom // dam tshig la ni gzhug par bya //
 ji ltar cho ga la sogs pa // gtor ma bdud rtsir byin brlabs te //
 rang rang sngags kyis dbul bar bya // khyad par so so'i mngon rtogs ni //
 gzhung mangs⁴⁶ 'jigs pas ma bris shing // yongs su grags pa cung zad bkod //

(2) 性瑜伽

de nas g'yon pa'i ming med dang // rgan po'i sor mo gnyis sbyar nas //
 shes rab khu ba byin gyis brlab // de yi mdun du chos 'byung bri //
 shes rab thabs kyi khu bas gtor // lhag pa lha yi dkyil 'khor ni //
 gzugs brnyan bzhin du gsal bar blta // srung⁴⁷ bas byin gyi brlabs⁴⁸ pa'i gnas //
 ting 'dzin byed pa rgyun mi becad //

(3) 聚会の飲食

de nas las kyi rdo rje yis // slob dpon la ni snod gnyis dbul //
 gzhan pa rnam la re re'o // mchod rdzas bla ma nyis 'gyur ro //
 de nas gzhan rnam mnyam por shes // 'ga' zhig tshim par ma gyur na'ang //
 rang gis blang bar mi bya ste // las kyi rdo rje (D.252a) las blangs na //
 ltung ba nyid du mi 'gyur ro // gang zhig lag nas ltung ba dag //
 dngos po gzhan gyis⁴⁹ dgab par⁵⁰ bya // 'dren pas ha cang gang ba min //
 len pas⁵¹ ha cang stong pa min // phan⁵² tshun gcig la gcig min bzhin //
 'dod ces ngag gis smra ba min //⁵³ 'dren pas pad kor⁵⁴ phyag rgya ste //
 g'yon pas steng du bskyod par bya // len pas kyang ni de bzhin no //
 phyag 'tshal nas ni dbul bya zhing // 'dren pas de bzhin shes par bya //
 g'yas pa'i lha nga sar btsugs te // thog mar thabs dang shes rab la //
 zgigs shig mdzes pa dam pa'i chos // 'di la the tshom bya mi rung //
 bram ze khyi dang gdol pa yang // rang bzhin gcig tu dgongs te rol //
 tshigs bead 'dis ni sbyin par bya'o // yang ni len pa po yis ni //
 bde gshegs chos la rin thang med // 'dod chags la sogs dri ma bral //
 gzung (P.313a) 'dzin rnam par spangs pa yis // de kho na nyid la skyabs⁵⁵ mchi'o //
 tshigs bead 'dis ni len par bya'o // bla ma'i bka' drin gnang ba yi //
 snod ni sa la gzhas⁵⁶ mi bya // gnang ba thob gyur gzhas⁵⁷ par bya'o //
 de las gzhan du chad par 'gyur // slob dpon rjes gnang ma byin par //
 rnal 'byor bza' btung⁵⁸ don gzhan min // slob dpon thog mar rang gi ni //
 phyag rgya mchod la de nas rol // btung ba dga' ba bskyed⁵⁹ pa tsam //
 de bas lhag dang chad pa min // bde ba bskyed⁶⁰ phyir btung ba ste //
 myos⁶¹ pa'i phyir ni ma yin no //

(4) 教誡

rnal 'byor lha yi nga rgyal dang⁶² // dus rnam kun du bya ba nyid //
 rdo rje phreng ba'i rgyud las ni // tshogs kyi 'khor lor 'dus pas⁶³ na //
 gtam gyi rnyed pa la sogs pa // de bzhin g'yeng ba spang bar bya //
 mchil ma 'dor la sogs pa dang // smad ra 'thog dang dgod⁶⁴ pa dang //
 rkang lag brkang bar mi bya'o // yang yang ldang dang 'dug pa dang //
 mgrin pa bsgyur sogs rtag tu spang // gang zhig dgos pa'i dbye ba la //
 brda skad phyag rgya bgo bar bya // 'dus pa'i dkyil 'khor dbang phyug gis //
 gnang ba byin par ma gyur par // gzhan du glu dang (D.252b) gar dang ni //
 de bzhin rol mo 'khrol la sogs // zab mo'i⁶⁵ skad sogs 'dri ba min //
 gnang ba thob nas ci bder 'gyur // gang zhig bza' dang btung ba la //
 thams cad bdud rtsir sbyar byas la //

(5) 内護摩

de nas rang gi lte bar ni // gang zhig dgos pa'i dbye ba yis //
 lha yi 'khor lo gnas par bsam // rang gi⁶⁶ lag pa g' yas dang g'yon //
 blugs gzar dgang gzar rang gzugs nyid // lte ba'i lha la mchod pa'i tshul //
 longs spyod tshogs kyis mchod par bya // de bzhin gzugs la sogs pa'i yul //
 mig la sogs pa'i dbang po nyid // ji ltar lha yi gzugs kyis ni //
 rnam par dag pa'i ro gcig pa'i // phan tshun⁶⁷ shes pa nyid kyis so //
 de yang *rdo rje phreng ba* las // lte ba padma'i dbus su ni //
 dpa' bo dbang phyug dran pa nyid // gang zhig phan tshun gcig la gcig //
 rnam par dag par mi shes na // de la 'khor lo'i 'bras bu med //
 (P.313b) thams cad dngos grub 'bras nyams 'gyur // gang du rim pa 'di yis ni //
 phyi dang nang gi⁶⁸ bdag nyid kun // ro gcig par ni spyad byas nas //
 de ni 'grub par 'gyur ba nyid // yang dag tshogs 'khor 'bras bu 'byin //

(6) 歌舞供養

myos byed bde ba bskyed⁶⁹ pa'i tshe // glu dang gar ni byed 'dod na //
 gnang ba thob nas rdo rje yi // glu gar rnal 'byor pa yis bya //
 de yang *brtag gnyis rgyal po* las // glu ni rnam dag sngags su gnas //
 gar ni sdom⁷⁰ pa byed pa nyid // de yi⁷¹ phyir ni glu dang gar //
 rnal 'byor pa yis rgyun du bya // dga' ba rdo rje bsdams pa yis //
 rkang pa rdo rje rtse gcig dang // rnal 'byor mnyam par gzhang⁷² pa yis //
 bde ba bskyed phyir gar nyid de // thar pa'i rgyur ni brjod par bya'o //
 rgyud las gsungs pa'i rim pa ste // gzhan du gnang ba ma yin no //
 de bzhin *rdo rje phreng ba* las // dga' ba bskyed nas gnang ba yis //
 glu dang gar ni bya ba nyid // gang zhig rdo rje bsdams la sogs //
 de bzhin lha ni mnyes pa nyid // rgyud las gsungs pa rdo rje'i glu //
kolla i re tthi ā bo⁷³ lā / mummu ṇi⁷⁴ re kakko lā⁷⁵ / gha ṇe⁷⁶ kṛ pi ṭa ho bādzda⁷⁷ i /
 ku ru ṇe⁷⁸ ki a i (D.253a) ṇa⁷⁹ ro lā / ta hiṃ ba la khādzda⁸⁰ i / gā⁸¹ ḍheṃ ma a ṇā⁸²
 pidzda a⁸³ i / ha le kwa ye kā linydza⁸⁴ ra pa ṇi a i / duṇdu ra bādzdzi⁸⁵ a i / tsa u sa
 ma katstshu rī⁸⁶ si hla / kappu ra lā i a⁸⁷ i / mā la aṇḍha ṇa sā linydza⁸⁸ / ta hiṃ bha ru
khā i⁸⁹ a i / phrem kha ṇa kha⁹⁰ ṭa ka reṇṭe⁹¹ / shuddha a shuddha ṇa mu⁹² ṇi a i / ni
 raṃ su aṃ getstsha⁹³ dā wi / ta hiṃ dza sa rā wa pa ṇi⁹⁴ a i / ma la a dze kuṇdu ru pā ṭa
i ḍeṇḍi ma ta hiṃ ṇa bādzdzi⁹⁵ a i /
 grub thob bla mas gsungs pa'i dbyangs // stong pa snying rje dbyer med par //
 don ston rdo rje'i glu nyid do // gzhan du rtog⁹⁶ pas phan tshun du //
 sbrel ba rdo rje'i glu ma yin // rdo rje rkang pa'i gar la sogs //
 gzhan du grags phyir 'dir ma spros // 'dir ni cho ga ji bzhin du //
 glu gar la sogs rim pa ni // byin gyis brlab par 'gyur ba nyid //
 de la thun mong (P.314a) byin rlabs⁹⁷ rtags // de yang *brtag gnyis rgyal po* las //
 gsungs pa rim bzhin shes byas te // 'khor lo'i dbang phyug mdun du ni //

gang zhig gus pas glu dang gar // byas pas dri yi mtshan nyid ni //
 thog mar sgog pa'i dri nyid de // de nas yang ni bya rgod dri //
 ga pur ma la ya yi dri // byin rlabs⁹⁸ glu yi mtshan nyid do //
 ngang pa⁹⁹ dang ni bung ba'i sgra // thos pas glu yi khyad par nyid //
 ba lang tshe yi sgra nyid ni // phyi rol nye ba'i mtshan nyid do //
 khyad par byin gyis brlabs pa'i rtags // de yang *rdo rje phreng ba las* //
 gal te thun mong rnal 'byor ma // 'dus pa'i tshogs su 'ongs pa na //
 g'yon pa'i tstsho ma'i¹⁰⁰ brda yis ni // bde ba'i phyag rgya bya ba nyid //
 de la sgrub pa po yis ni // gtam 'dri rnams¹⁰¹ rtog byar mi rung //
 cung zad dri¹⁰² bar 'dod na yang // gang zhig rdo rje slob dpon nam //
 yang na las kyi rdo rje yis // brda dang phyag rgya 'dri bar 'gyur //
 sna tshogs gzugs kyi rnal 'byor ma // yang dang yang du 'gro zhing 'ong //
 de la the tshom za ba dang // ya mtshan 'jigs par byed don sogs //
 sgrub pa po yis mi bya ste // byas na dngos grub nyams pa nyid //

(7) 残滓のバリ施与

de nas dkyil 'khor sud pa na // lhag ma'i gtor ma sbyin par bya //
 de yang *rdo rje phreng ba las* // lhag ma'i (D.253b) gtor ma'i sbyor ba[=sbyin pa]¹⁰³ yis
 //
 dngos grub rnal 'byor chen¹⁰⁴ por 'gyur //
 Oṃ kṣi utstshinde ksetra¹⁰⁵ pālāya swā hā // sngags 'di¹⁰⁶ brjod cing kha phrus¹⁰⁷ gdab
 //

(瑜伽女の識別)

yang na¹⁰⁸ slob dpon sngon 'gro bas // gang zhig ma mthong gyur pa na //
 rtags kyi sbyor ba'i mtshan nyid ni // rnal 'byor gyis ni shes par bya //
 gang zhig byad zlum kha dog dmar // bzhin¹⁰⁹ bzang smin ma ring ba ni //
 'od dpag med kyi rigs shes bya // de la rus sbal phyag rgya bstan //
 cung zad sbom zhing mig¹¹⁰ dkyus ring // dkar ser mdog can yid 'phrog ma //
 sna tshogs gos ni 'dzin pa ste // ri mo gsum 'greng dpral bar mtshan //
 (P.314b) gang du gnas pa'i sa dag tu // grong ba'i shi sogs gtam smra ba //
 'di nyid rin 'byung rnal 'byor ma // dpal ldan mkha' 'gro zhes byar blta //
 rtse gsum pa yi phyag rgya bstan // g'yon brkyang ba yi gar stabs kyis //
 de yi mdun du blta bar bya'o // lag tu g'yon pas byin nas ni //
 phyag rgya rab tu ston par byed // kha dog gnag cing gos nag 'dzin //
 skra li dpral ba gzhu yi dbyibs // mtshan ma'i rnam par rtog par ston //
 sems 'gro¹¹¹ ba yi mar rab grags // g'yon bskum dge ba'i gar gyis ni //
 phyag rgya rab tu bstan par bya // mi bskyod pa yi rigs su shes //
 g'yon pa'i stangs kyi¹¹² lan yang¹¹³ 'debs // lus sbom gsus pa cung zad 'phyang //

mig yangs rdzi ma mang ba la // byin¹¹⁴ pa sbom zhing mdzes pa ni //
 sa 'og grub¹¹⁵ pa shes pa ste // rnam snang rigs su shes pas na //
 de la dung gi phyag rgya¹¹⁶ bstan // mig skam pa spu thams cad langs //
 lus skem lag pa ring ba la // mkha' 'gro zhes sgra rab tu sgrogs //
 'di nyid don grub rigs su shes // de la rab blta mtha' ma bskor //
 lag pa g'yon gyi dbye ba yi¹¹⁷ // ba dan phyag rgya bstan par bya //
 ji ltar 'di dag la mkhas pas // rab tu 'bad pas shes par bya //
 dri ba'am phyag rgya byed pa na // de yi don gyis mchod par brjod //

(聚会の区別)

gang zhig 'di rnam thams cad la // dpa' bo rkyang¹¹⁸ pa'i bya ba ni //
 dpa' bo'i ston mo zhes (D.254a) su brjod // thsogs kyi dbang phyug de lta min //
 de bzhin dpa' mo rkyang¹¹⁹ pa la // dpa' mo'i dbang phyug ston mo nyid //
 de ltar 'khor lo'i dbang phyug la // shes rab thabs dang bcas pa nyid //
 gzhan yang gang zhig stobs dang ni // myos byed khu ba rkyang pas ni //
 'phags pa Phyag na rdo rje'i zhabs // stobs dang myos byed khu bar ni //
 mi ldan yon tan bsod nams nyams // gtso bo tshogs kyi (P.315a) dbang phyug gis¹²⁰ //
 khyad par shes rab g'yon du bzhag // 'dir ni ji ltar 'byor pa dang //
 ji ltar nus pa'i rim pa yis // lnga¹²¹ yi bdag nyid dkyil 'khor sogs //
 rnam par dag pa'i cho gas mchod // thams cad rang gi rnal 'byor gyis //
 'dir ni dge bar 'dod pas na // rnam dag lha yi rnal 'byor gyis //
 slob mas tshogs kyi rnal 'byor goms // nang gi dbang phyug gyur pa ste //
 rgyun par shin tu goms pas na // gang tshe cho ga 'di yis na //
 rim pa 'di ni rnam par spyad // de tshe rtag tu goms pas ni //
 spros bcas spros med rnam par gzhas¹²² //

3) 随 行

de nas sgrub pa po yis ni // zhal bsil¹²³ phyag physis go la dbul //
 yon tan sogs pas mnyes par bya // rang gi lha yi 'khor lo nyid //
 dang po thar bar 'gyur ba ste // de nas bsod nams bsngo bar bya //
 bzod par gsol la tshogs kyi ni // 'khor lo gshegs par bya ba nyid //
 bdag nyid dbang phyug gyur pas na // gzhan la phyag ni bya mi dgos //
 cho ga'i rim pa 'di yis ni // ji ltar rigs par 'bad gyur na //
 de yi bsod nams mtha' ma ni // tshad gzung¹²⁴ nus pa ma yin no //
 de ltar Phyag na rdo rje yis // gsungs pa'i rjes su 'brang bar 'gyur //

2 奥書

tshogs kyi 'khor lo'i cho ga yid bzhin nor bu zhes bya ba paṇḍi ta Ratna rakṣi tas mdzad
 pa rdzogs so //

rgya gar shar phyogs kyi paṇḍi ta Ratna¹²⁵ rakṣi ta'i zhal snga nas¹²⁶ bod kyi lo tsā ba
shākya'i dge slong rdo rje 'dzin pa Grub pa dpal bzang pos brgyur ba'o // //

-
- 1 P. der
2 P. 'dis
3 P. bzhin
4 P. 'phreng
5 P. ba
6 P. pa
7 D. dis *revised by* P. 'dir
8 P. pas
9 P. spangs par
10 P. *omits* la
11 *Context reads* dang. DP. kyi.
12 P. rje
13 P. bsdu pas
14 P. shes
15 D. 'brel *revised by* P. 'grel
16 P. bsgrub
17 P. mongs
18 P. la
19 P. dgor
20 P. bslobs
21 P. bsgom
22 P. yis
23 P. bzhag
24 P. par
25 P. smras
26 D. bral *revised by* P. dral
27 P. thig
28 P. gtang
29 P. gsil
30 P. ming
31 P. pa
32 P. gyis
33 P. sgom
34 P. spangs
35 P. lta
36 P. sma
37 P. sa ni
38 D. mi dim
39 P. ra
40 P. ril bu
41 P. pa
42 D. yis *revised by* P. yi
43 P. bsrung
44 P. bsrung
45 P. su
46 P. mang
47 P. bsrung
48 P. brlab
49 P. gyi
50 P. dga' bar
51 P. pa
52 P. phun
53 P. *adds* yang.
54 P. skor
55 P. *adds* su.
56 P. bzhag
57 P. bzhag